

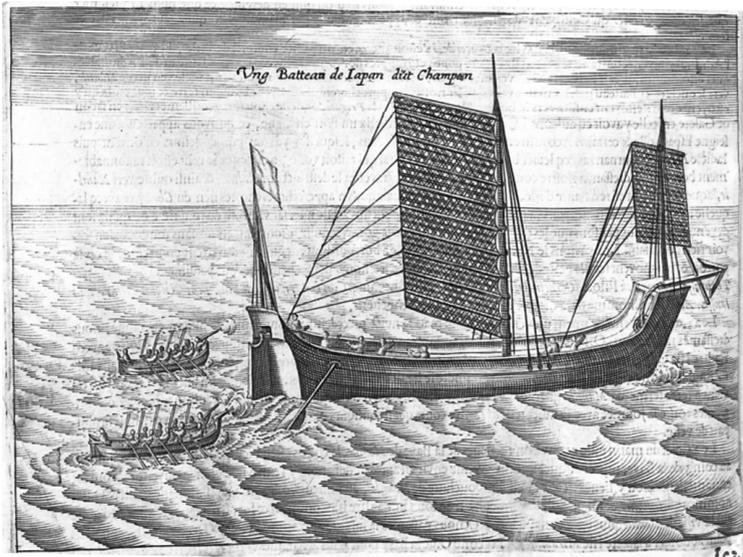
日文研

2015年9月

no.55

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター



「日本の船」

(ファン・ノールト『世界一周紀行』フランス語版、アムステルダム、1610年刊)
ファン・ノールトは世界一周に成功した最初のオランダ人である。海賊であったファン・ノールトは、太平洋においてスペイン船を略奪するために1598年に四隻から成る艦隊でロッテルダムを出港したが、マゼラン海峡を通過した後早くも二隻を失い、フィリピンに辿り着いた。さらに、スペイン艦隊との海戦で多くの乗組員を失ったため、海賊行為を諦め、喜望峰を回り、1601年にオランダへと戻った。帰国して間もなくファン・ノールトの航海日記が『世界一周紀行』として出版され、複数の言語で版を重ねた。日文研は1610年に出版されたフランス語版を所蔵している。『世界一周紀行』には、日本船の図版が収録されている。これは、ファン・ノールトがスペイン艦隊との海戦の直前に、マニラ近くで出会った日本船のスケッチを元に作成されたものである。図版に見える小舟は日本船を拿捕するために、ファン・ノールトが派遣した哨戒船である。拿捕された日本船には価値のあるものはなかったため、ファン・ノールトは略奪せず、日本人の船長と挨拶を交わした後に別れた。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）

日文研

— エッセイ —

石上阿希

リチャード・レインの春画研究—京都と春画

2

北浦寛之 映画『あん』とハンセン病問題

8

楠 綾子 外交史を考える—国会論戦から

14

フレデリック・クレインス 大坂の陣で堺に居合わせたオランダ人

20

—平戸オランダ商館往復書簡にみる江戸初期の日本—

25

高 文勝 二階俊博訪中団への厚遇に思うこと

32

坪井秀人 笛吹き の四〇年

38

真鍋昌賢 浪曲研究をはじめた頃—森川司さんの思い出とともに—

43

— センター通信 —

山田奨治 図書館とデータベースの経済効果

45

須田秀美・亀井祐子 財務運用係の仕事

48

共同研究

基礎領域研究

彙報

所員活動一覧

61

62

73

エッセイ

リチャード・レインの春画研究―京都と春画

石上阿希

春画のあつまるころ

この四月から「日文研」の特任助教となった。卒業論文のテーマを春画に決めてから幾年月、日文研の春画コレクションにはずっとお世話になっていく。十数年前の日本では、一学生が春画の原本に触れることの出来る研究機関はほとんどなかった。しかし、なぜかここ京都には春画やあるいは春画にまつわる人々が溢れかえっており、迷える学生はその恩恵を受け続け、はてには（大変ありがたいことに）「日文研」に正式に潜り込むことに成功した。

私は学部生から院生、さらにはPD・専門研究員と長きに亘って立命館大学に所属していた。立命館大学にはアート・リサーチセンターという研究所があり、そこには春画研究の第一人者であった林美一のコレクションが収められている。その整理を手伝いながら、なんとか卒論を書き上げた後、林とともに春画研究を牽引してきたリチャード・レインの遺したコレクションを整理する機会に恵まれた。レインは山科で息を引き取り、その膨大なコレクションは彼の意向によりホノルル美術館に収められることに決まったのだが、ハワイに送る前である程

度の整理が必要ということで春画・艶本に関してお声がかかったのである。その後、無事に全コレクションはハワイに引越し、現地の人々の目を楽しませているが、二〇〇三年頃からの約十年間、京都には日文研コレクション、林コレクション、レインコレクションと質・量共に優れた春画が集まっていたことになる。

このエッセイでは三大春画コレクションのオーナーの内、リチャード・レインのことについて書いてみたいと思う。

日本文化との出会い

リチャード・レインは、一九二六年アメリカの南部に生まれた。一八歳の時にアメリカ海兵隊に出願し、情報部専門学校に入学する。この学校では「日本を理解するため」の授業として映画「丹下左膳」などを鑑賞した。終戦後の一九四五年から一九四六年にかけて通訳として九州各地に駐屯した。帰国後、ハワイ大学に入学し西鶴の「好色五人女」に出会う。この時からレインと江戸文学ひいては浮世絵や春画といった江戸文化とのつき合いが始まる。その後、コロンビア大学で西鶴の研究を続け、文学修士号を取得している。

日本での留学生活―一九五〇～五二年

コロンビア大学を卒業したレインは、奨学金を取得し一九五〇年から一九五二年の間、日本で留学生活を送った。この時の様々な体験が、後のレインに大きな影響を与えたといっている。この刺激的な三年間の様子は、レイン自身が、『伝記画集・北斎』（一九九五年、河出書房新社）や『定本・浮世絵春画名品集成』（一九九八年～二〇〇〇年、河出書房新社）など

で語っている。ここではそれらの記述を基に、彼の活動と交友関係を振り返っていききたい。

留学当初、彼は東京大学と早稲田大学の学生として浅草馬道町に住んでいた。東京生活がはじまった翌年の一九五一年のはじめ頃、レインは性科学者高橋鐵（一九〇七〜七二）と出会う。しかし、この頃は学究的なつき合いではなく、主に高橋の「あそび」のお供をしていたようである。レインが住んでいた馬道町の近くには象潟町や新吉原といった花柳界があった。「華やかな花柳界の脂粉の匂いの命の躍動感、生きる喜びが満ちた雰囲気包まれて、思いやりのある、美しい年増の女性を側にして、独り静かに黙々と杯を口に運ぶ」高橋の傍らで、レインはその趣と雰囲気を楽しんでいた。三味線を得意としていたレインは、この時小唄や俗曲も覚え、それら数々の唄を後年まで宝物として大切にしていた。

江戸の記憶が残る東京の町でレインは様々な「江戸文化」を体験していたといえるだろう。やはりこの頃交友を深めた江戸川乱歩（一八九四〜一九八七）に連れられて、湯島天神にあった茶屋に行ったこともある。この茶屋は歌舞伎の女形たちが経営していたものらしく、江戸時代というところの「陰間茶屋」であったようである。乱歩が同性愛について強く関心を持っていたことは有名であり、江戸時代の男色資料を蒐集するなど男色研究に対しても熱心であった。後年、レインと男色資料を交換している記録も残っている。

乱歩はまた、レインに画家伊藤晴雨（一八八〇〜一九六一）を紹介している。彼のアトリエを訪れたレインは多分に刺激を受けたようである。

その画家の「視覚的」な反応に、私は特に感嘆した。私が話しに持ち出した昔の江戸の事物を、ほとんど全て、即座にスケッチして―しばしばキャプションまで添えて―説明して

くれたのである。そのスケッチは、そのまま印刷にまわせるような見事なものであった。その中には、特に私のために描いてくれた大きな春画のスケッチもあった。

残念ながら晴雨のスケッチはコレクションに残されていないが、この時の印象は特に強烈だったようである。レインに「最後の浮世絵師」と言わしめた晴雨の姿は、北斎の老境への興味へとつながり、後の『伝記画集・北斎』を完成させる一つの原動力になったのである。

当時の研究テーマは西鶴であったが、浮世絵にも強い関心を持っていた。浮世絵研究家である渋井清はレインが恩師と呼ぶ人物である。一九五一年に初めて渋井のもとを訪れたレインは、渋井のコレクションの内、春画である『婦美の清書』を見せられ、絵師は誰かと尋ねられた。渋井は既にこの組物の絵師を栄昌としていたが、レインはそのことを知らず、「鳥橋斎栄里」と答えた。すると、渋井はしばらく黙したあと、「君が正しいのかもしれない」と呟いたそうである。

この後も、渋井の膨大な春画・艶本コレクションを閲覧することを許され、更には写真撮影もさせてもらっていた。ここでの経験が、後のレインの研究に大きな影響を与えたといえるだろう。

一九五二年からは、研究の拠点を京都大学に移す。京大の大学院で博士論文の準備をしていたレインは、研究を進める上で江戸の風俗習慣を詳細に学ぶ必要があると感じた。そこで、レインは当時風俗研究の第一人者であった江馬務（一八八四〜一九七九）に教えを請うため、江馬が教鞭を執っていた京都女子大学で英文学講師の職を得る。江馬のクラスで唯一の男子学生となったレインは、江戸風俗について学ぶかたわら、東京での生活がそうであったように、京

都や大阪で生きる人々やその文化と深くつきあっていった。

レインは常々、「浮世絵研究者たる者は日本にまだわずかに残っている『浮世』を可能な限り実体験すべきである」と述べていた。日本での留学生生活は、まさに自身の言葉通りの日々であったといえるだろう。多くの人に出会い、様々な文化に触れることで実感に基づく「江戸」を形づくることが可能となった。

この貴重な留学生生活を終え、帰国したレインは一九五八年コロンビア大学で博士号を取得する。その後、コロンビア大学などで日本語や日本文学、日本美術を教えた。また、ホノルル美術館の学芸員も勤めている。

春画研究のはじまり

レインは、一九六〇年代初めころから日本に住むようになる。最初の頃は浮世絵研究だけでは身が立たず、カメラマンを目指して日本各地の風景を撮っていたこともあった。しかし、一九六五年のある夜、その後のレインの研究の方向性を決定づける出会いがある。当時、レインはロンドンの出版社から『EROTIC ART OF THE EAST』に載せるための日本の性美術に関する原稿を依頼されていた。その記事を書くにあたって高橋鐵の自宅を訪れたのであるが、その場に偶然にも林美一（一九二二〜九九）が居合わせていた。レインが初めて林に会ったのは留学生時代の一九五一年に遡るが、春画研究のために緊密な交流がはじまるのはこの夜からであった。レインが「三奇人サミット」と呼んだこの日以降、林とは年に二回ほど会合を重ねるようになる。更に、研究上の問題点などは文書でやりとりをし、原本やその写真などの交換もかなり行っていたようである。そうして、レインは本格的に春画研究を始めることになった。

レインの遺したもの

一九六〇年代の日本において、春画を研究することは容易ではなかった。一九六二年には林の出版した艶本研究『艶本研究 国貞』の「参考資料」が猥褻文書であるとして起訴されている。「国貞裁判」と呼ばれたこの裁判は、決着までに一三年を要し、林と出版社は有罪となった。レイン自身も一九七〇年前後に著作の発禁処分を三回受けている。出版だけでなく、展覧会についても海外では問題のないものが、日本国内では「削除」されてしまう状況を、レインは「日本の公的機関は未だ『大人の美術』を受け入れる水準に達していない」と語っていた。

しかし、出版に関しては次第に状況が好転し、一九九〇年前後からは修正なしで図版を掲載出来るようになった。一九九五年には、林とレインの共同監修による『定本・浮世絵春画名品集成』シリーズの刊行がスタートする。各巻一冊毎に、一人の絵師の一作目を完全復刻し、翻刻・解説を加えたものであり、一三絵師二四作品と別巻が三冊刊行された。これがレイン晩年の最大の仕事となった。しかし、一九九九年に病気のために林が亡くなる。シリーズ半ばのことであった。レインは「私たちふたりにとって、日本における春画の出版の解禁は、やや遅すぎたようだ」と述べ、林の志を継ぎこのシリーズの完結をめざしたが、遂に叶うことはなかった。最後の執筆となった「芸術新潮 歌麿と浮世絵エロチカ黄金時代」が出版される直前の二〇〇二年、七六年の生涯を閉じたのである。

「偶然性によって人生は豊かになると私は思っている」。レインは人生の時々に起こる偶然を好んだ。彼のコレクションがホノルル美術館に移ったことは冒頭に述べた。しかし、たとえ一時でも二人が遺したコレクションが同じ京都に存在していた偶然を、きっとレインは喜んでいただろうと考えている。

(国際日本文化研究センター特任助教)

映画『あん』とハンセン病問題

北 浦 寛 之



図一

今年のカンヌ国際映画祭「ある視点」部門のオープニング作品として上映された河瀬直美監督『あん』は、映画で言及されることの少ないハンセン病問題を現代的視点から捉えた作品である。私の科研費（若手研究B）テーマが「映画・テレビにおけるハンセン病患者の表象についての歴史的考察」ということもあり、二〇一五年五月三〇日の一般公開前から注目していた作品だった。同研究の調査のためしばしば訪れているハンセン病資料館（図一）やハンセン病療養所多磨全生園（図二）がある東京東村山市の協力でロケがおこなわれ、その土地の雰囲気や映画に投锚されている。ハンセン病という重いテーマを含んだ内容であるが、特別劇的な演出や撮影がなされているわけでもなく、登場人物たちの変化の推移がゆったりとした時間の流れの中で捉えられている印象だ。

ドリアン助川の同名小説を原作にした本作は、どら焼き



図二

屋「どら春」を一人で切り盛りする中年男性千太郎（永瀬正敏）とそこを訪れて「あん」作りを手伝うことになったハンセン病回復者の徳江（樹木希林）の関係を軸に、店の常連客である女子中学生ワカナ（内田伽羅）も加わって3世代間の交流が展開される。映画の冒頭、早朝、アパートの一室から出てきた男性が重い足取りで眼下に桜が広がる屋上までやってくる様子をカメラは後ろからフォローする。映画の幕開けを祝うような朝の光が映えることもなければ、満開の桜の美しさが強調されることもない。単にその男の日常が始まりを告げているだけである。だが、その男千太郎がいつものように淡々とどら焼きを焼き（な）にせ、永瀬は撮影の合間にもどら焼きを焼いて一般客に販売するという徹底ぶりだった⁽³⁾、傍らにはいつものようにワカナが腰を落ち着かせてどら焼きを頬張っていると、七六歳だという女性がバイトで雇って欲しいという予想外の出来事が起こる。その女性吉井徳江は、冒頭で千太郎の背後で特別視されることのなかった満開の桜を見上げてはそこから差ししてくる陽光に心躍らせる。「どら春」の周囲の「春」を楽しむ彼女のそうした様子は、「春」の存在さえ代わり映えしない日常に溶け込んでしまっている千太郎とは明ら

かな差異をもって映し出されるのである。

映画は徳江が、こうして周囲の環境に敏感に反応し、あん作りの際には、原料の小豆に語り掛けながら仕込み作業する様子を収めながら進行していく。小豆に感謝しながら、それがどのような育ってきたかを徳江は想像すると言うのだ。こうした徳江の行為や発言は同時に、らい予防法のもとで療養所に隔離され辛い経験をしてきた彼女が、どのような思いで暮して来たのか、想像させる役割も担っている。

千太郎が体調不良で店を休んだ日、徳江は暗くて狭い「どら春」の店内で一人閉じこもって仕込み作業をするが、そのとき「ここが閉まっているのが嫌なのよね」と言って窓のブラインドを開ける。次に、ブラインドを開けた彼女のの前には、開店を待っていた客がいて、初めて接客をすることになるのであり、この一連のショットは、療養所に留まらざるを得なかった過去の客から、社会に出て他者と交流を持つとうとする徳江の現在を象徴したのものとして印象深い。

だが、この徳江の思いは、無残にも断ち切られてしまう。映画は現実のハンセン病問題と接続するように、差別や偏見で「どら春」の客足が遠のいていく仕儀を伝える。現実にも、一九九六年にらい予防法が撤廃され隔離の必要がなくなったにもかかわらず、ハンセン病回復者は差別や偏見で社会復帰が難しい状況にあり、また、戸籍や本名を変えていることもあり、故郷に戻れず、肉親とも会えない人が多くいる。その現実の問題を映画は、取り込んで描写する。徳江は、ただ視界を覆っていたブラインドを開け、暗闇から陽の当たる世界を見ようとしただけなのに、周囲はその彼女を偏見の目で見てしまうのである。

そもそもハンセン病を扱う映画の特徴として、誤解を改める啓蒙的要素が含まれている点が挙げられる。例えば、一九七四年に公開された『砂の器』（野村芳太郎監督）では、音楽家が

ハンセン病の父の存在を隠すために殺人を犯してしまう話から、全国ハンセン病患者協議会が抗議をおこなった。製作者サイドとの話し合いがもたれた結果、「ハンセン氏病は、医学の進歩により特效薬もあり、現在では完全に回復し、社会復帰は続いている。それを拒むものは、まだまだ根強く残っている非科学的な偏見と差別のみであり、戦前に発病した本浦千代吉のような患者は日本中どこにもいない」という字幕を映画のラストに挿入することで落ち着く^③。あるいは、家族にハンセン病患者がいることから小学校入学を拒否された児童を描く実話に基づいた映画『あつい壁』（中山節夫監督、一九七〇年）では、医者がハンセン病に対する正しい知識と差別の現状を説いている。また、比較的最近の二〇一〇年の『ふたたび swing me again』（塩屋俊監督）においては、映画の始めと終わりに、病気の説明とともに、らい予防法によって患者たちが隔離されてきた歴史が字幕で伝えられている。

こうした過去の映画と比較して、本作では、ハンセン病についての客観的で正確な説明が抜け落ちている感じが否めない。確かに、ワカナが唐突に図書館でハンセン病に関する図書を手にとって、その感想を述べる場面がある。なるほど原作小説では、千太郎がインターネットを活用して積極的にハンセン病の情報を集めるが、映画においては、ワカナが本を読んで勉強している様子が強調されるのであり、年齢的に一九九六年のらい予防法以後に生まれ同時代を知らない中学生のワカナが、ハンセン病について学習することに歴史の伝達という重要な意義が垣間見られる。それでも、何度も強調される徳江の変形した手の状態について、最後まで適切な説明がないまま終了し、単に徳江から聞いた千太郎の「病気は治っている」という発言で片づけられている印象だ。そこから先は、観客が「世間で冷たいよな」という劇中の千太郎の言葉に共感して、ハンセン病への適切な知識を個人的に収集することが求められているようである。

すなわち映画は、徳江の問題だけに収斂していくことはない。徳江だけでなく、人生に問題を抱えるのは、千太郎やワカナも同じだ。映画は彼らが、彼らなりの問題を抱えながら、それと向き合い再生へと向かう過程に力点を置いている。そして、徳江の存在が、彼らの再生の大きな原動力となるのである。

千太郎は傷害事件を起こして服役した過去があり、そのとき面会に来てくれた母親の話をきちんと聴かないまま永遠の別れに至ったことを悔いている。徳江が「どら春」の前を通りかかったとき、そうした過去を持つ千太郎を店の外から見かけては、彼の目が「自分が療養所に連れてこられた時と同じ悲しい目をしていた」ことに衝撃を受けたと言う。他方、客離れが深刻となったことで、徳江がみずから「どら春」から去っていくのだが、その直前には、今度は千太郎が店の外にいて、店内の寂しそうな徳江を見つめる様子が提示される。結婚したが、子どもを産むことを許されなかった徳江にとって、千太郎は息子のような存在であり、千太郎にとっても徳江は実の母親代わりであったことは、以上のような「どら春」の外から中へと向けられる両者の眼差しから強く伝わってくる。

家庭に問題を抱え、進学にも悩むワカナが徳江との会話から大きなものを得るのは、月が綺麗な夜のことだった。本来ならそのときのやりとりが、映像として表現されてしかるべき重要な場面である。けれども、そのことはワカナの言葉から語られるだけであって、冒頭でも述べたように河瀬監督の手で劇的に演出されることはない。静かな夜の大きな出来事が、映画の調子を変えない一連の流れの中に、落とし込まれている。ただ、そうであっても、その場面がやはり重要なのは、徳江が「月は（私たちに）見てもらうことで存在する」と語り、生きることの意義と結びつけている点からもわかる。徳江が周囲に対しておこなって来たように、我々

は、徳江、千太郎、ワカナたち登場人物の声に耳を傾け、そこから彼らの心の叫びや、内面の変化を想像することが求められているのである。

映画の終盤、療養所に戻った徳江に千太郎、ワカナが会いに行くが、彼女はすでに亡くなっており、代わりに徳江の友人からテープレコーダーを渡される。そこには徳江が亡くなる直前に千太郎、ワカナに向けて語ったメッセージが入っていて、とうとう二人と徳江との接触は文字通りの声によってのみ果たされる。この映画が繰り返し要請してきた、聴くということ、そしてそこから想像するという行為が、二人の頭の中で徳江を蘇らせる。この映画で唯一、想像の世界が映像となって立ち現れる場面であり、そこで徳江は穏やかな表情を浮かべている。これまで、世間に黙殺されて来た徳江の声を、千太郎、ワカナがしっかりと受け止めている証左だと言えるだろう。また千太郎にとっては、実の母親の声を真剣に聴くことができなかつた過去に対して、それを乗り越えるための儀式としても機能している。次には千太郎が映画の冒頭と違って、満開の綺麗な桜に囲まれて、呼び込みをしながらどら焼きを売っている姿が映し出され、通過儀礼を果たした彼の再生が印象付けられるのである。

本作品は、ハンセン病問題に言及しながらも、そこに収斂していくことはない。それでも、最後の場面で見られたように、徳江というハンセン病回復者の声を千太郎、ワカナが文字通り聴くことは、大きな意味を持っていたはずだ。一般社会がじゅうぶんに拾い上げてこなかつた元患者たちの声にしっかりと耳を傾けることこそが、この映画が我々に突き付けた重要な課題であつたに違いない。

(注二) 東村山市は「ハンセン病そのものを描いた映画ではないが、多磨全生園や同園の『人權の森

構想』への理解につながる」として全面協力を決めた(『読売新聞』二〇一五年五月一四日付朝刊)。

(注二) 「千太郎 永瀬正敏」『あん』オフィシャルブック(キネマ旬報社、二〇一五年)、五三頁

(注三) 藤野豊『いのち』の近代史―「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』(かもがわ出版、二〇〇一年)、六〇五頁

本報告は、科学研究費補助金(若手研究B)「映画・テレビにおけるハンセン病患者の表象についての歴史的考察」(課題番号・二六七七〇〇七七・二〇一四〜二〇一六年度)を受けたものである。

(国際日本文化研究センター助教)

外交史を考える——国会論戦から

楠 綾子

学会報告のために一九五一年一〇月から一一月にかけての国会会議録を読みなおすなかで、少し驚いたことがある。サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約の批准国会であった。第一次世界大戦後のドイツに対するヴェルサイユ講和条約とは異なり、対日講和条約は日本に

政治的、経済的な制約を課さず、原則として賠償義務も規定しなかった（東南アジア諸国に対しては個別に役務賠償を開始することとされた）という点で、きわめて寛大な講和条約であったという評価が今日ではおおむね定着している。ただ東西対立がもっとも厳しい時期に結ばれたために、講和条約は事実上、西側諸国との間にのみ成立する結果となった。さらに安保条約は日本を米国の冷戦戦略と結びつけるものであった。だからよく知られているように、社会党や知識人、労働組合などを中心とする勢力には憲法の理念を重視する観点から、講和条約にも安保条約にも反対する声が多かった。

しかし、講和条約と安保条約に対する批判は、全権団を構成した保守系政党にも広くみられた。吉田茂首相の自由党に所属する議員も、さすがにあらさまな反対は控えているものの、とくに安保条約については諸手を挙げて賛成しているとはいえない。沖繩、小笠原や千島列島など領土の処遇については与野党を問わず不満が共有されているし、賠償についても、日本軍の侵略によって直接的な被害を受けた国々への謝罪よりもむしろ役務賠償が日本経済に与える影響への懸念が先に立った。講和会議に中国が招かれず、インドやビルマは参加を拒否するなど講和条約がアジア諸国との関係を構築することには必ずしも成功しなかったことへの批判もあった。それは講和条約によって日本が不可避的に東西対立の一方の側に組み込まれることへの忌避感の表明であり、同時に日本は「アジアの一員」として独自の地位を追求すべきであるというある種の信念の発現でもあった。以下は吉田に近い北澤直吉の発言である（衆議院平和条約及び日米安全保障条約特別委員会、一九五一年一〇月一八日）。

アジア諸国は、日本と文化、伝統、宗教、思想あるいは世界観をともし、進んでは運命を

もともにすると申しましても過言ではないと思います。(中略) 日本の経済自立達成のためにも、はたまた将来の日本の発展のためにも、またアジア自身の興隆のためにも、アジア、なかならず東南アジア諸国と日本との善隣友好関係を急速に樹立することが必要だろうと思うのであります。(中略) 日本は世界の民主陣営強化のためにも、西ヨーロッパとアジアのかけ橋となつて両者を結び紐帯となることが必要であり、またこうすることが日本の将来の発展を確保するゆえんであると思うのであります。世界は日本が東亜の安定勢力となることを期待しておるとわれわれは確信いたしておるのであります。

日本がアジアをいちばん理解しているのだ、日本こそが植民地支配から脱し独立国家の建設に苦闘するアジア諸国を支援できるという不思議なほどの樂觀と、東南アジアが日本の経済自立を支えるとの期待がこの時期に存在したことは、第二次世界大戦後の日本がアジアに対してどのように向き合つたのかを考えるうえで重要な点であるように思う。

安保条約に対する保守勢力の反発も激烈であつた。条文上、米国には日本を防衛する義務がないなど、日米安保条約が他に類をみないほど一方的な内容であつたことが憤激を買つたことは間違いない。だが本質的には、基地を提供する、すなわち独立後も米軍がひきつづき日本本土に駐留することへの嫌悪感であり、安全保障を他国に依存することへの拒否反応だったといえよう。のちに首相となる三木武夫(当時国民民主党幹事長)は「独立国の中に外国の軍隊が駐留するということは重大なことであります。(中略)そこで、多数の国民がその事実をよく納得して、米国の駐留軍と日本人との間に善意と協力の関係が成立しなければ、かえつてこの駐留軍隊は日本の防衛力にはならないのであります」(一〇月二六日、本会議)として吉田に

安保条約の詳細を問いただした。中曽根康弘（国民民主党）も「私たちは、何ゆえこのような一方的に保護されるような安全保障条約が出ざるを得なかったかという根拠を実は承りたい」（衆議院平和条約及び日米安全保障条約特別委員会、一〇月二三日）と吉田に迫った。

だから再軍備は当然だと考えられた。日本が軍隊を建設し自衛の責任を負うことができるようになれば、不平等な安保条約は改定され、また米軍は撤退するものと理解された。吉田首相自身、「根本は、日本が独立を回復して、その独立は他国によって保護せられておるのであるということになれば、国民の自負心といえますか道徳心が許さないと思います」（衆議院平和条約及び日米安全保障条約特別委員会、一〇月一八日）と述べている。そのうえ「この安全保障条約はいわゆる暫定とりきめであって、なるべく早くこのとりきめは終了せしめたいという趣意で書いてあるのであります」（同、一〇月一九日）と明言した。講和条約と安保条約は一月に賛成多数で国会の批准を得たが、少なくとも安保条約はあくまで暫定的なものであるとの前提で認められたというのがおそらく実態であろう。条約の文言のみならず、日本が軍備をもたず米軍基地がその空白を埋めるという仕組み自体を、日本の政治指導者は暫定的なものと理解した。さらにいえば、東西対立のなかで日本が置かれた地位は流動的で、たとえばインドのように中立を追求し、冷戦構造を超える可能性が残されているとの理解も存在した。こうした「現実」認識を踏まえなければ、「自主」「独立」ということばが磁力を放ちつつ飛び交った一九五〇年代の政治空間と、日ソ国交回復へ、そして安保改定へと指導者たちを駆り立てたものをつかむことはできないであろう。講和と安保をめぐる政治対立は、これまで一応は勉強していたし、国会会議録にも目は通していたけれど、あらためて読んで気づかされたのは講和と安保の枠組みの脆さである。同時に、現実の日本にどこまで選択肢が存在したのかはさてお

き、講和条約と安保条約を受け入れることがけっして容易ではなかったという事実である。

安保条約の実施協定である行政協定が一九五二年二月末に成立したあと、イギリスの外交官は次のように予測した。いかなる国であれ他国の軍隊には可能なかぎりすみやかに撤退してもらいたいと望むものであるが、日本がそうした要求を持ち出せるのは自衛ができるほど強くなっているからである。駐留軍の権利を確定する行政協定は、ナシヨナリズムを刺激し再軍備への誘因となるであろう。同様に佐藤栄作の日記には、一九五二年二月二八日の欄に「一路再軍備への準備のみ」と記された。

じつは博士論文を書いているころは、両者の意味するところがわかったようなわからないような感触で、いま読んでみるとなんとなく自信のないまま引用していることがありあろうか。がえて冷や汗が出る。両者ともやはり吉田政権が選択した安全保障の形態は暫定的で、日本の再軍備が米国の安全保障関係を変えようという前提に立っていたのである。史料の読み方が未熟であったといわねばならない。

講和・独立期から六〇年以上経った今日、再軍備論者が主張したようには実際の再軍備は進まなかったし、安保条約は一九六〇年に改定されたものの、基地の提供とその運用を中核とする二国間関係そのものは変わっていないことをわれわれは知っている。一九五〇年代初頭の吉田の選択はやがて「吉田路線」として、第二次世界大戦後の日本外交の基本路線となった。あと知恵的に議論を組み立てたつもりはもちろんない。講和と安全保障をめぐる日本政府の決定は、あくまでその当時の国内外の情勢にもっとも適合的なものを追求した結果であり、吉田自身「吉田路線」を敷いたわけではないと論じてはいる。それでも、どこかで「吉田路線」が定着するという道筋を描いて当時の状況を理解していたかもしれない。

もうひとつ思い出すのは、『中央公論』元編集長の粕谷一希氏のことばである。二〇〇九年の秋であったか、粕谷氏が主宰する勉強会で吉田茂の選択について報告させていただいたとき、氏は、あのころはこんなふうに整然とものごとが進んでいるようにはみえなかったんだけど、という趣旨のことを言われた。そのときは生意気にも、同時代の人間にみえる風景と歴史研究とはやはり違うものかと思っただけだった。けれども、いまあらためて考えると、吉田の選択が定着していくとはとても思えなかったという実感、講和と安保の枠組みがおよそ恒久的なものとは考えられていなかったという空気を伝えられたのかもしれない。あとから振り返って必然とみえることも、当事者や当時を生きている人びとにとってはけっしてそうではないという、当たり前といえれば当たり前のことをあらためて考えさせられる。

この春、日文研に着任した。いまはまだまったく余裕がないけれど、さまざまな学問分野との交流のなかで日本政治外交史研究の可能性を広げることができれば、日本研究への貢献となるだろうか。そして、混沌とした現実には外交史研究を通じてどれだけ迫ることができるか、どこまで忠実に再現できるのか、知的刺激に満ちたこの新しい環境で追求したいと思っている。

(国際日本文化研究センター准教授)

大坂の陣で堺に居合わせたオランダ人 —平戸オランダ商館往復書簡にみる江戸初期の日本—

フレデリック・クレインス

一六一五年一月二十五日、京都で商務に当たっていたエルベルト・ワウテルセンというオランダ東インド会社の事務員が堺に到着した。東インド会社が当時採用していたのはグレゴリオ暦であるので、この日付を和暦に変換すると、慶長十九年十二月二十六日となり、大阪冬の陣が終わった直後に当たると、その翌日に乗物で大坂へ赴いたワウテルセンは、大坂の大部分が全焼した様子を目の当たりにした。大坂でワウテルセンは九郎兵衛という商人の世話になった。オランダ人事務員は大坂や堺で商品を販売するために現地の商人の仲介に頼っていた。その九郎兵衛の話によると、「大坂の陣の直前に」秀頼が堺を焼き討ちするという噂が広まっていた、彼はそのような事態が起こることを恐れて、堺で保管されていた東インド会社の布織物の商品を数回に分けて大坂へ移送させようとした。最初は布織物五反を大坂へ移送させることに成功したが、二回目に堺へ七反の布織物を取りに行った時に、川を越える許可を得ることができず、仕方なく商品を九郎兵衛の義理の兄弟の家に保管した。その家は「平野」川の西側にあり、その五〜六日後に全焼した。というのも、秀頼の命令の下に放火が行われ、一万五千軒の家が全焼し、四方に大きな空地ができたという。これはいわゆる平野焼き討ちのことである。

このように大坂の陣の戦火に巻き込まれ、東インド会社はいくつかの商品を焼失したが、他方では利益も大いに得ることができた。というのも、この時に多くの大名が大坂に集まっていた、砲弾を造るための鉛の需要があったほか、大名たちが挙って東インド会社の布織物を購入していたからである。彼らは京都の商人よりも気前よく払ってくれるので、ワウテルセンにとって大坂への旅はまずまずの収穫があったようである。

ここで紹介した情報は、堺にてワウテルセンより平戸オランダ商館長スベックスに宛てた一六一五年一月二十九日付の書簡に記載されている。堺に滞在していたワウテルセンからオランダ商館に宛てた同年付の書簡がこの他に数通現存している。そのうち、二月十九日付の書簡によると、大坂は荒地と化してしまい、破壊された家々の修復は、大阪城の堀の埋め立て作業が急がれたので、後回しにされた。堀の埋め立ての資材に用いるために、むしろ、さらに多くの家が破壊されることになった。そうした状況の中、大坂に住むことが困難となったので、九郎兵衛は堺に家を借り、ワウテルセンもそこに滞在していたが、もはや商売をすることはできなくなっていた。

その後の一六一五年四月十一日の書簡には、戦火により布織物が焼失したという九郎兵衛の話は嘘で、九郎兵衛がこれらの布織物を大きな利益で売り捌いていたことが判明したため、ワウテルセンは九郎兵衛が借りている家から出て、他の宿泊先に移ったと記されている。

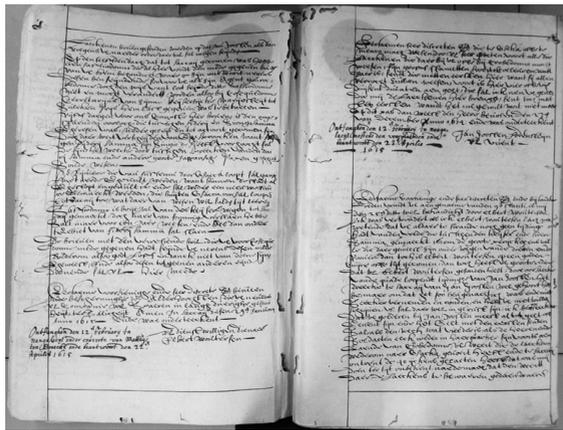
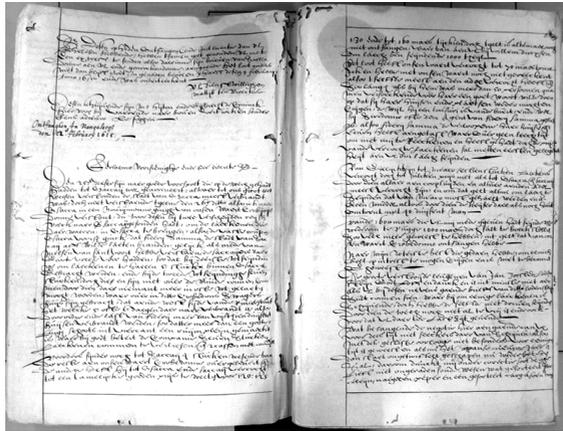
また、五月一日付の書簡では、秀頼が堺を焼き討ちするとの噂が再び浮上し、秀頼がそのような行為に出れば、家康も大坂へ戻り、戦いが再開されると予想されているので、戦火を逃れるために、ワウテルセンは堺に保管していた商品をすべて持って京都へ移ったと記載されている。その手伝いをしたのは、もう一人の商務員マティス・テン・ブルッケである。テン・ブ

ルツケは商品を海路で室津へ運び、そこでワウテルセンは尼崎経由で商品を京都へ運び、二条室町薬師ノ町の与兵衛という商人の家に預けた。この家にオランダ人も宿泊することになり、大坂の役が終わるまで待機していた（一六一五年五月十七日付および五月二十八日付、七月二十八日付の書簡）。

以上紹介したのは、各書簡の内容のうちのほんの一部のみであるが、このような書簡からオランダ人商務員たちの行動や当時の戦乱の状況がある程度窺い知ることができる。しかしながら、大坂の陣がなぜ起こったのか、家康か秀頼のどちらが正当であったのか、家康がなぜ勝利を収めたのか、といった従来の歴史学が扱ってきた、政治史や国家史に関わる大きな問題に対しては、これらの書簡から答えを得られるわけではない。とはいえ、ワウテルセンや九郎兵衛のように大坂の陣に巻き込まれた個人は、これらの歴史上の大きな問題を気に留めていたのであろうか。彼らにとっては、混乱の中でいかにして財産や命を守るべきかという目の前のことで精一杯であったはずである。

歴史をどのような視点でみるのかによって、史料の価値が大きく変わってくる。歴史的出来事の因果関係を説明しようとする場合、歴史の大きな流れを作った家康などの関連史料に目を向けるべきであり、ワウテルセンのような一般人が書いた史料は分析の対象になり得ない。ところが、逆に当時の個人が何を見て、何を考えて、どのように行動したのかについて知りたければ、このような東インド会社の職員の書簡は情報の宝庫である。私はどちらかというと後者に興味を持っている。

私は去年ライデン大学文学部のフィアレ先生と共にハーグ国立文書館が所蔵している東インド会社関連文書の複数の史料群の調査を行ってきた。この調査を通じて、本エッセイで取り上



1615年1月29日付ワウテルセンの平戸商館長宛書簡（シンティア・フィアレ撮影）。ワウテルセンの書簡は当時の平戸商館の写本「受信書簡1614年8月4日から1616年12月29日」（ハーグ国立文書館所蔵NFJ276）に所収されている。

げたワウテルセンの書簡のような、平戸オランダ商館の往復書簡が数多く現存していることが判明した。一六〇九年から一六三三年までの間だけでも五〇七通の書簡を特定することができた。人間文化研究機構において、「平戸オランダ商館往復書簡の基礎的研究」がネットワーク型基幹研究プロジェクト（在外日本資料調査・活用による日本研究と日本文化理解の促進）の一つとして採用されたので、これから数年間かけてライデン大学と共同でその翻刻・翻訳・注釈を行う予定である。

なお、これらの書簡は江戸初期のものである。日本の古文書と同様にくずし字で書かれていて、文法や用語も現代オランダ語と異なるため、解読にはかなりの労力がかかる。また、日本の人名や地名もオランダ人が聞いた通りに綴られているので、難解なものも多い。たとえば、九郎兵衛は *Crohijoyedonne*、与兵衛は *Joffroyedonno*、秀頼は *Fiderijsamma*、家康は *keijser*（皇帝）と表記されている。今後、これらの書簡を解読した上で、和訳を出版することによって、当時のオランダ人による日本での見聞記録を日本の読者に提供していきたい。

（国際日本文化研究センター准教授）

二階俊博訪中団への厚遇に思うこと

高 文 勝

はじめに

二〇一五年五月二三日夜、北京の人民大会堂で、自民党総務会長の二階俊博氏率いる約三千人の訪中団を歓迎する「中日友好交流大会」が行われ、中国の習近平国家主席が出席し、日中関係について演説した。孔子の言葉を引用し、訪中団に厚い歓迎の意を表した習主席は、日中関係の発展を重視する中国の基本方針は変わらないと強調し、日中友好と民間交流の重要性を強く訴えた。翌二四日付の中国共産党機関紙『人民日報』は、習主席の演説を一面トップに掲載し、二階氏訪中団について「民間交流の推進は両国関係改善にプラスのエネルギーになる」と伝えた。日中関係に厳しい状況が続く中、二階訪中団に対する中国の姿勢は異例の厚遇と言えよう。

では、なぜ中国側は二階訪中団を厚遇したのか、その背景には何があるのだろうか。

一 日中関係改善の地ならし

結論から言うと、二階訪中団への異例の厚遇は、中国の対日関係改善に向けた意志を表し、日中関係の本格的な改善につなげていくための地ならしであろう。

日本による尖閣諸島（中国名・釣魚島）のいわゆる「国有化」以来、日中関係や両国の国民

感情は悪化の一途を辿った。日中対立は、日本ばかりでなく中国にも不利益だと認識した中国政府は、二〇一三年一〇月に開かれた「周辺外交工作座談会」で対日戦略の変更に踏み出した。この会議において、習主席は、(対日関係について)「今の状態が続くことは双方にとって不利益だ」、「日本との関係は周辺外交の中で最も重要なものの一つだ」と強調し、「経済のほか、民間の文化・人的交流などを拡大させなければならない」と関係改善を指示した。だが、戦後レジームからの脱却を目指している安倍政権は、現在の日中間に存在する領土問題や歴史認識問題で妥協しない姿勢を示しつつ、国内には集団的自衛権の行使容認を含む安保法制を整備し、対外的には、「積極的平和主義」を掲げ、日米同盟を強化すると同時に、豪印比越などとの連携を強めて、東シナ海や南シナ海問題で中国への批判や攻勢を鮮明にしている。

こうした状況下、中国政府が日中関係を前に進めようとしても、それを推進しようとする社会的・政治的雰囲気はなかった。実は、中国国内には、習主席と安倍首相の二度にわたる首脳会談について猜疑的な見方も存在した。こうした中で、「親中派」と言われる二階俊博・自民党総務会長が約三千人の訪中団を率いて中国を訪れた。中国にとって、これは絶好のタイミングである。訪中団を大いに歓迎しても、中国の国内世論はこれを日本に対する「弱腰外交」とは捉えないだろう。なぜなら、訪中団は財界、観光業界、自治体首長、日中友好団体などからなる民間訪問団だからである。

その意味で、今回の二階訪中団の中国訪問は中国にとって特別な意味を有する。中国政府は日本国民と日本政府を分けて考え、中国の国民に、「日中関係悪化の原因はすべて日本の右翼と安倍政権にあり、一般の日本国民は中国に友好的である」と説明すること、悪化した中国人の対日感情を和らげることができると考えた。また、自民党内での「親中派」で、安倍政権に

影響力を持つ実力者としての二階氏に、安倍政権が中国の立場に理解を深めるよう働きかけを期待した。こうした観点から、中国側は二階訪中団の中国訪問をタイミングよく効果的に使った。中国の主要メディアが日中関係を前向きに捉えて大々的に報じた理由はここにあると思われる。中国政府が狙ったのは、民間交流を通じた日中関係の改善への関心を高め、両国関係の発展に向けて友好ムードを形成することである。それは、日本向けよりも、むしろ中国国内向けの戦略であったと言えよう。

二 中国の対日政策

二階訪中団への厚遇と習主席による歓迎の講話は、日本との関係改善の方向性を示すものであった。

第一に、日中関係の悪化のきっかけになった尖閣諸島（中国名：釣魚島）問題について、習主席は一切言及しなかった。尖閣諸島（中国名：釣魚島）問題はきわめて重要であるが、両国関係のすべてではない。また、国家主権の問題として、国民感情にかかわるので、その解決は非常に難しい。中国としては、解決の見通しのない領土問題で日中関係を緊張させ、日本を敵に回すのは不得策である。習主席がそれに言及しなかったのは、そのためであろうと考えられる。

第二に、対日関係改善への強い意欲が明示的に表明された。訪中団への異例の厚遇と歓迎に加え、日本に関連する記事が『人民日報』の一面に大きく報じられたことは、対日関係改善の方向が確定したことを意味する。さらに、習主席が「中国政府と人民を代表し、また私個人の名義で」訪中団を歓迎し、また、「訪中団を通じて日本国民に心から挨拶」したことは、日中関係改善について、中国の日本国民に向けた国際的な約束だと言っても過言ではない。

第三に、日中関係の重視にはつきりと言及した。中国にとって、日中関係は最も重要な二国間関係の一つであると同時に、最も扱いくにくい二国間関係でもある。習主席が明言したように、「中国は中日関係の発展を非常に重視している。中日関係は何度も風雨を経験したが、中国側のこうした基本方針は終始変わっていないし、これからも変わらない」。中国が日中関係を重視するのは外交辞令でなく、本音である。なぜなら、それは「隣人は選ぶことができるが、隣国は選ぶことができない」からであり、さらには「中日友好事業は両国と両国民にとってメリットがあり、アジアと世界にとってメリットがある」からである。

第四に、日中友好は実現できるとの確信が示された。現在、両国関係が困難な状況にあるが、「中日両国民が心を込めて友好的に付き合ひ、徳をもって隣をなすのであれば、必ず世代友好は実現できる」、「互いの戦略的互恵関係をそのまま進めていけば、日中関係はよい結果になる」と述べたように、習主席は両国の努力により日中関係が最終的によくなると信じている。

第五に、「民を以て官を促す」民間交流の重視が打ち出された。習主席は、「中日友好の基盤は民間にある。中日関係の前途は両国民の手に握られている。両国関係が順調に発展していないときこそ、民間交流の強化が必要だ」と述べ、民間交流の重要性を強く訴え、特に若い世代の交流を重視していく姿勢を示した。いわゆる民間交流・民間外交であり、これも中国による対日政策の方向性の一つである。今後は政府指導の下で、対日民間交流がますます活性化していくと違いはないと考えられる。

第六に、日本軍国主義の侵略の罪を隠し、歴史の真相を歪曲することは許されず、侵略の歴史を歪曲し、美化する言動を、中国人民もアジアの被害国の国民も、「正義と良識を持つ日本国民」も許さないと断ったのは、歴史認識問題で安倍首相による戦後七〇年談話を牽制したも

のではあるが、『産経新聞』の論調に見られるように、日本を分断し、日本政府と日本国民を離間しようとしたものではない。なぜなら、日本軍国主義指導者を日本国民と区別し、戦争の責任を一握りの軍国主義者に帰し、日本の国民もあの戦争の被害者だという「二分論」は、もともと中国政府が対日賠償請求を放棄した理由であり、日中国交正常化の政治基礎であって、中国の対日姿勢の基本原理だからである。逆に言えば、中国が歴史認識問題や日本首相による靖国神社参拜問題に拘る理由はここにある。

三 対日政策調整の背景

現在、日中関係は確実に改善の方向に向かっている。その主な原因は中国側の歩み寄りによるものである。中国側が日本との関係改善に積極的な姿勢に転じたのは、日中対立が中国にとって不利益だからである。中国経済の減速が鮮明になり、南シナ海の岩礁埋め立て問題で対米関係が緊張している中、中国としては、対日関係改善を急ぐ必要性に迫られている。

第一に、経済成長減速への強い危機感がある。今年前半期のGDP成長率は前年比七パーセントと六年ぶりの低成長で、リーマン・ショック直後とほぼ同じ水準に落ちこんでいる。内需型の重工業の生産は振るわず、不動産が冷え込み、鉄鋼やセメントなどは大幅な生産過剰に陥っている。輸出が伸びず、国内消費も伸び悩んでいる。政府は景気下支えのために利下げを繰り返しているが、目立った効果は見えなかった。一方、円安や中国での生産コスト上昇などに伴って日本企業の中国離れが進み、対中投資が激減している。さらには、中国の石油輸入量の増加により、外貨準備高が減少した。それらを考慮に入れると、中国の全体としての経済環境は、リーマン・ショック時よりはるかに悪化している。こうした現実の中で、中国にとって

「日本との経済協力は重要になっている」（産経新聞）、中国が対日政策の調整に着手したことには、経済成長減速への強い危機感から「日本の技術や資金とともに、減少した日本人観光客を呼び戻す狙いがある」（読売新聞）という見方は当たっている。

第二に、日本のアジアインフラ投資銀行（AIIIB）加入への期待がある。AIIIBとは中国主導で設立するアジア向けの国際金融機関である（二〇一五年末に発足）。創設メンバーは五七カ国で、日本は米国とともに参加を見送った。中国としては、日本のAIIIB参加に強く期待している。なぜなら、日本はもし参加すれば、AIIIBに巨額の出資金を提供しなければならぬからである。さらには、中国はAIIIBのような国際金融機構を運営する経験に欠けているのに対し、日本は国際開発銀行の運営実績において世界から信頼・評価されているからである。だからこそ、中国はどうしても日本の協力とサポートを必要としている。そのため、中国は日本のAIIIBへの加入を強く求めており、中国が日本との関係改善に積極的な理由の一つはそこにあると思われる。

第三に、米中関係の悪化がある。二〇一三年一月に中国が防空識別圏を設定して以来、中国に対して強硬外交を進めてきたアメリカは、日米同盟を強化すると同時に、尖閣諸島（中国名・釣魚島）問題で日本寄りの姿勢をとり、南シナ海の岩礁埋め立て問題で中国を厳しく批判し、中国に圧力をかけようとしている。今年四月の安倍首相の訪米によって、日米同盟は一層強固になった。こうした状況下、日中関係の悪化が続けば、日本の対米傾斜はさらに強まり、中国のアジア・太平洋地域における孤立化のリスクが高まることを、中国は懸念している。そのような事態を避けるため、また、今年九月に予定されている習近平主席の米国訪問を成功させるため、日本との関係改善が必要だと中国は考えている。

第四に、日中対立は中国外交に悪影響を与えたのである。日中緊張が高まれば高まるほど、日米同盟が強固になる。さらに、安倍首相は「法の支配」を高唱し、東シナ海と南シナ海問題で米豪印比越などと連携し、中国への批判を強めている。中国を取り巻く国際環境は厳しくなった。中国は日中首脳会談を中断・拒否することによって日本に圧力をかけようとしたが、問題の解決にならなかつたばかりでなく、結局、外交で自分の首を絞めることになり、中国の国際イメージを大きく低下させた。こうした状況の下で、交流による関係改善が必要と認識した中国は、対日外交においてこれまでの強硬的な姿勢から積極的な姿勢へと転換したのである。

第五に、安定的な国内政治と権力基盤が整ったという側面に注目する必要がある。良好な日中関係は中国の国益にかなう。それは誰でも分かっている。だが、現下の厳しい日中関係の中で、日本との関係改善を積極的に進めることは、中国のナショナリズム勢力から厳しい批判を受けやすいのが現実である。こうした国内の批判を覚悟で日中関係の改善を推進するには、安定した国内政治や強固な権力基盤が不可欠である。実際、反腐敗運動により、中国政府は国民から絶大な支持を得ている。日本との関係改善の積極化は、中国政府の今後の政權運営への自信のあらわれと言えよう。

おわりに

日中関係が改善方向に向かっているとはいえ、急速に、または大幅に改善することはないであろう。なぜなら、それは、両国間の問題が解決されなのまま依然として存在しているからであり、さらに、日中いずれもその政策が根本的に変化したわけではないからである。より重要

な問題は、両国ともお互いに不信感と警戒心を持っており、両国内に相手の立場から世界を見ようとする人がいないことである。それでも、私自身は日本首相による靖国神社参拝のようなよほどのことがない限り、日中関係はこれ以上悪化することはないと思う。日中双方にとって、当面、最も重要なのは、互いに慎重に対応し、関係改善の流れと雰囲気を持していくことであろう。

（天津師範大学政治文化と政治文明建設研究院研究員／
国際日本文化研究センター外国人研究員）

笛吹きの四〇年

坪井 秀人

フルートを吹いている。一般には趣味、ということになるのだろうが、ほぼ例外なく毎日楽器を出しては吹いているので、それを「趣味」と呼ぶのはそぐわないものを感じる。では何なのかというと、それが自分ではよくわからない。間違いなく言えることは、僕が一介のアマチュアであるということである。そしてその立場が僕には大変好ましいということなのである。音楽大学を出れば必ず音楽家になれるわけではない。音楽大学を出なければ音楽家になれないわけではない。とはいえ、音楽の専門教育を受けて音楽で生活の糧を得るプロの音楽家の生

活にあこがれがなかったといえれば嘘になる。しかし、自分にそんな天分がないことはわかっていたし、仮にあったとしても、運にも左右されることの多い芸術の競争社会の中で生き残っていくのは、学者の生活以上にしんどいことだろうと思ってきた。

フルートという楽器を手にしたのは高校一年生の頃だったろうか。どうして楽器を始めたかと思っただのか、ある時期までは覚えていたはずだが、今はもう思い出せない。それぐらいこの楽器との付き合いが自然なものになってしまったとも言えるのだが。僕は何しろ歌を歌えば音痴だったし、音楽という科目も大の苦手だった。小学校低学年のとき、木琴が僕だけたけず、母親が学校から呼び出されたとか、中学の時、リコーダーが一人だけ吹けずに居残りさせられて、いつまでも吹けずに泣きそうになったとか、そんな苦い記憶ばかりが思い出されてしまう。当然のことながら、音楽のセンスがないと見切った親には、僕にピアノを習わせるなどという発想はひとかけらもなかった。

それでも、どれだけ音楽が苦手で下手くそでも、僕は音楽のことが好きだった。音楽ではいつも悪い成績しか取れなかったのも、高校の時には芸術科目は美術を選択したくらいだが、コーラスで下の声部を歌える同級生やピアノで『展覧会の絵』なんかを楽々と弾いてしまう友人たちを羨望のままなぞして遠くから眺めていた。音楽を聴くことには夢中になっていたし、何しろ中学を卒業した春休みに観たルキノ・ヴィスコンティの『ヴェニスに死す』に打ちのめされて、その映画で使われていたマーラーの作品やら、それからベルクなどの暗い音楽に背伸びしてのめりこんでいたというのが、フルートを始めた時期の高校生の僕だった（因みにヴィスコンティの作品はその後大学生の時分までにはほぼ全作観た）。

告白すればフルートという楽器が格別に好きだったわけではない。何しろリコーダーの居残

り特訓のトラウマの持ち主であったくらいだから。本当を言うと、実はクラリネットの音に憧れていた。それで親に頼みこんでクラリネットを買ってもらうことになり、父親と一緒に家から一番近い楽器屋さんに見に行ったところ、なんとクラリネットはその時は在庫がなかった！「フルートならありますよ」楽器店のおじさんのその一言で、僕の笛吹ききの人生が決定したのである。まこと不純な出会い系であった。

最初に手にした楽器はYFLというヤマハの初心者用の楽器で、もちろんキイの穴の塞がったカバード。一人では始められないということで自宅の近所の五反城教会で開かれていたレッスンに通うことになった。先生は近藤富士子先生という方で、譜面もろくに読めなかった僕に、これを読めと『楽典』なんか貸してくれたっけ。最初に吹いたのは「白鳥」（サンサーンス）とか「トロイメライ」。まさによちよち歩きからの開始だった。

大学入学後はオーケストラに所属して、以来数年の中断はあるものの、名古屋大学交響楽団で六年ほど、名古屋では他に室内管弦楽団を少々、大学院時代にはOBオケの公演を学生オケ時代の仲間たちと企画、それが今日まで続いている社会人オーケストラ、名古屋ムジックフェイライン管弦楽団の結成へと繋がった。名古屋大学に奉職した期間の後半は名古屋大学交響楽団の団長（顧問）も務めさせていただいた。

金沢時代の八年間では地元の社会人オケや臨時編成の室内オケの教会コンサートに出演したぐらいで大人しくしていたのだが、一九九二／九三年のシーズンにウィーン大学の在外研究でウィーンに滞在していたときに、ムジックフェラインと並ぶウィーンの伝統あるホール、コンツェルトハウスに所属するアマチュア・オーケストラであるコンツェルトハウス演奏協会（当時の正式名称はKonzertvereinigung der Wiener Konzerthausgesellschaft）の定期演奏会に出演

できたことは、正直ちょっと誇らしい。指揮はアルバン・ベルク弦楽四重奏団の初代ヴィオラ奏者、ハット・バイエルレで、僕はウィーン・フィルのクラリネット奏者ノルベルト・トイブルがソロを受け持ったウエーバーの協奏曲第二番で出演。これは一生の思い出だ。

ともかく学生時代以来今まで、こんなに色々な曲をオケで演奏できるなどは、楽器を始めた高校生の時には思いも寄らなかった。ベートーヴェンなどにもそこそこは関わったが、大人数のオケに所属してきたこともあり、どちらかと言えばマーラー（四・五・一〇番と『大地の歌』以外の全ての交響曲。因みに一番と七番は二回演奏）やリヒャルト・シュトラウスのような二十世紀の大編成の作品を演奏することが多かった。

自分にとってこれはという記憶に残る演奏体験といえば、学生時代初めてメインのトップを吹かせてもらったブルックナーの交響曲第九番、マーラーの二番、三番それに九番、シベリウスの六番（これも二回）、バルトークの『管弦楽のための協奏曲』、ドビュッシーの『海』、それにフォーレの『ペレアスとメリザンド』、声楽付きの曲ではバッハの『マタイ受難曲』とハイドン『天地創造』、モーツァルトのハ短調ミサ曲あたりだろうか。

これだけ素晴らしい作品の演奏に関われたことは（もちろん多くは完璧には及ばない演奏内容だったとはいえ）、幸運なことだったとしか言いようがない。もし今後生き永らえて、なおかつチャンスがあるのなら、マーラーの『大地の歌』と一〇番（クック版）が吹けたら、もう思い残すことはないと言ってもいい。いや、その上でもし可能ならマーラー九番をもう一度、ブルックナーの九番もふたたび出来れば……などと、これだけ欲深くいれば、簡単には往生できまい。とはいえ、寄る年波にも勝てず、忙しくなる一方の仕事との調整も難しく、毎年オケ人生の〈引き際〉を考えるようになってきている。悲しいがこれも現実。

さて、フルートのレッスンは、その後、学生時代の加藤敏先生、須藤辰郎先生（名古屋フィルハーモニー交響楽団）、大海隆宏先生（同）と続き、金沢から名古屋に戻ってからは中越志奈先生、そして現在の寺本義明先生（東京都交響楽団首席）と様々な先生に師事してきた。中越先生からはフレンチ・スクールの伝統に則った音色づくりを学んだ。レッスンの前半はひたすらアンブシュアに神経を集中しての音作り。一つの音を延ばすロングトーンを延々と続けるなかなか過酷な練習。しかし、それまでの力任せの音出しとはまったく違う新しい世界を見せていただいた。かつては名フィルの、そして現在では都響の首席を務められる寺本先生からは、ニコレ、ツェラー、ブラウという、ドイツ・フルートの系譜に連なる大きな音楽の骨格のつかみ方と、何よりも、練習自体をどのように論理化するかという、音楽におけるロゴスの世界を教えていただいている。音楽の構造をどう理解したらよいか、自分の身体と発音される音の関係をどう制御したらよいか、寺本先生のレッスンには毎回新鮮な発見が必ずある。五十歳を過ぎてもこうして知らない扉のありかを見せたいだけということは、生きているのも無駄じゃないと思わされる貴重な経験だ。



写真の下の楽器が長年愛奏してきたヘインズ（本体は銀製でリップが金）。これは中越先生からお譲りいただいたもので、必ずしも吹きやすいとはいえないが、すばらしく甘い音色を持ったこの楽器を通して、現代のフルト界を席捲するパワー・フルートの傾向とは異なる、（誤解を恐れずに言えば）古き雅なる笛の音を探求する手がかりを得られたと思う。ルイ・ロットからヘインズに移行してフレンチ・スクールを守り続けたランバルや、終生一管のロットを吹き続けた、わが最も敬愛するところの笛吹き、フェルナン・デュフレヌの演奏の素晴らしさも、この楽器を持たなければあまり実感できなかっただろう。

もっともオケをやっているとは抜けのよくて野太い音がほしくなり、持っていた木管フルート（ファイリップ・ハンミッヒ。第二群の方だけれどこれで『マタイ』も吹いた）を手放して、それを売ったお金でフォリジの頭部管を購入した（写真上）。ヘインズの系譜と関わるフランスの楽器だが、歌口がヘインズより大きめで独特の卵形、楽器がとても豊潤に鳴ってくれる。一時期はこれにすげ替えて吹いていたが、ドビュッシーやフォーレを吹いた時に、スレンダーなボディに少し立派すぎる顔を付け替えたみたいで、本体との微妙なインコンパティビリティが気になり、あえて本来のヘインズに戻した。今後こうした浮気をするとは思わないと思うが、宝くじがもし当たったら、一昔前に作られていたヘインズの本管を入手する、というのが、わがはかない夢だ。かくして業の深い笛吹ききの人生はまだ当分は続きそうだ。

（国際日本文化研究センター教授）

浪曲研究をはじめた頃―森川司さんの思い出とともに―

真鍋昌賢

現在、日文研では、浪曲（浪花節）のSPレコードが収蔵され、その整理が進められている。この浪曲レコードは、故・森川司氏（二〇一四年一月没）が所蔵していたコレクションである。正確に言うと、森川さんが所蔵していたコレクションを、二〇一一年一月にわたしが譲り受けて、その後、二〇一四年三月に、森川さんと相談の末、日文研に寄贈した。晩年体調を崩してからの森川さんは、自分のレコードがまとまったかたちで継承されることを望んでいた。わたしとしては、公的な機関に収蔵され活用されることが森川さんのコレクター人生の総仕上げになるだろうと考えていたので、生前に寄贈を完了できて、ほっとしている。

森川さんとの最初の出会いは、一九九五年であったと記憶している。博士前期課程の大学院生であったとき、修士論文のテーマとして浪曲をとりあげようと思い立ったわたしは、芝清之氏を木馬亭（東京）に訪ねていった。芝さんは、浪曲業界とファンをつなぐ『月刊浪曲』を発行していた浪曲研究者であり、『浪曲人物史』や『東西浪曲大名鑑』など、今となっては貴重な浪曲史の基本資料を残している。大阪から来た大学院生を珍しく思ってくれたのだろう。芝さんは丁寧な質問に答えてくれた。そして最後に「大阪にいるんだったら、この三人に連絡をとって見たらどうか」と言って紹介してくれたのが、芦川淳平氏、林喜代弘氏、そして森川さんだった。浪曲研究に必要な資料収集と基礎研究が、大学の外側で、着実にそして地

道に進められていた一方で、まだまだ研究対象としての浪曲の認知度は低い時代であった。当時においては、のちに訪ねていく唯二郎氏を含めて、浪曲研究の先達はみな、いわゆる在野の方であった。

何はさておき、森川さんに手紙を書いてみよう。そう思って、自分が大学院生で浪曲に関心をもっていること、戦時下の「愛国浪曲」をテーマにして論文を書きたいと思っていること、図書館で読める浪曲関連の書籍はおおよそ読んだが、なかなかSPレコードの音源にふれることができないこと、当時一番気に入っていた二代目廣澤菊春の声をもつと聴きたいということ、などいろいろと書き連ねたように思う。どのようにSPレコードを探せばいいのかも、駆け出しのわたしはよくわかっていなかったのである。ほどなくして森川さんから電話があり、「二度お会いしましょう」と言っていた。聴かせてほしいと頼んだSPレコードのいくつかを所有しておられるということだった。

それからというもの、定期的に森川さんと会って、ご自身と浪曲の関わりを聞かせていただくようになった。森川さんは、一九二三年（大正一二）に大阪で生まれた。祖母や父に連れられて浪曲席に通うようになり、次第に自分ものめりこみはじめたという。青年時代には、レコードを集め始めていたが、戦火ですべて焼失した。所有しているレコードはすべて、一九七〇年代に入って再び収集しはじめたからのものだった。森川さんの浪曲の好みは明確であり、低く太い胸声を至高としていた。しかし蒐集の方針は、好き嫌いを超越しており、網羅的だった。結果的に森川さんの集めた浪曲SPレコードは、関西・関東の垣根を超えたコレクションになっていった。

森川さんの浪曲との関わりに耳を傾けるうちに、次第に話題は、戦争体験に及んでいった。

戦地での生活、シベリアでの抑留生活の聞き書きは、森川さんの青春時代の回想に耳を傾けることでもあった。その頃、わたしは東京や大阪の素人道場を訪ねて、浪曲ファンの聞き書きを、少しずつ進めていた。浪曲ファンになるきっかけ、浪曲に魅かれる理由、それらは様々なのだが、交流を通じて私が聞き取っていたのは、浪曲の受けとめられ方とでもいうべきものだったように思う。浪曲がいかにしてひとりひとりの聴衆と出会い、人生に照合され、固有の意味を帯びていくのか。人生における意味は、曲師の三味線に支えられた演者の声もたらす物語によって生みだされる。時として、聴くというよりも浴びるという表現が妥当とも思える声の力への関心は、ファンとの交流のなかで膨らんでいった。聞き書きの内容は、過去から現在まで多岐に渡ったが、そのなかには、戦時下での浪曲体験もあった。道場の常連のなかには、戦争体験者の方々が、まだ多くおられたのである。戦地であるいは銃後で、浪曲がどのようにそれを楽しむ人たちの生を支えていたのかという問いは、私よりもはるかに年配の方々とダイアログのなかで培われていった。森川さんの浪曲にまつわる思い出話にしても、それだけが想起されるというのではなく、人生の回想そのものと切り離せないものだった。国家の枠組みが極限にまで強調される状況において、兵士がどのように生きようとしたのか、生きざるをえなかったのか。当時のわたしにとっては、そうした人生の回想に寄り添い、そして質問するという営みが新鮮であった。人生の語りは、過去の事実そのものの再現というよりは、むしろ語られた時点において、語り手によって意味づけられた出来事である。しかしそれは、ひとりひとりの生き様のなかにあった大衆文化のあり方に、にじりよるための貴重な手段に他ならない。

修士論文執筆後も、森川さんとの交流は続いた。梅田の喫茶店でお会いすることが多かつ

た。森川さんはビリヤードが好きだったので、ビリヤード場で、球を突きながらお話をうかがうということもしばしばだった。そのうちにご自宅にうかがい、SPレコードを聴かせていただくようになったりもした。始発電車に乗って、東寺の骨董市に出かけ、蒐集の現場につきあわせていただいたこともあった。

そういえば、実際の口演を聴きに、森川さんと一緒に浪曲席に足を運んだことはほとんどなかったように思う。私がお会いしてからの森川さんは、もちろん、現役の浪曲師とのつきあいはいろいろあったのだが、定席にせよ、ホールでの大会にせよ、興味はうすくなっていた。今から考えればもっと浪曲席に同行してもらい、その眼から浪曲の現在がどのように見えるのかを語ってもらえばよかつたなと思う。森川さんは、自分のコレクションを通して、浪曲の醍醐味が実に多様であることを多くの人に知ってほしいという気持ちがあった。そして、業界に数十年かけて蓄積され、そして忘却されようとしている物語や節の膨大なストックが、再度掘り起こされるべきだと考えていた。客席で味わえる節のタイプが増えることは、ジャンルの間口を広げてビギナーを取り込むきっかけになるだろう。また、選択と比較の幅が広がるという点で、浪曲の奥行きを掘り下げてディープなファンをつくりあげることにもつながっていくのではないかと私も思う。

民間コレクターのコレクションは、偶然と必然がからみあう地道な蒐集行為のなかで集められたひとつひとつのモノの積み重ねでできあがっている。つまり、それは時代的背景や、社会的背景、そして個人的背景のもとに、紆余曲折を経て集積されたひとまとまりの個性的な業績だと言えるだろう。森川さんのコレクターとしての蒐集思想やファンとしての浪曲観について、今回の寄贈を機会にいま一度考えてみたいと思っっている。

コレクターにスポットライトをあてることは、公的な機関が私的なコレクションをどのよう
に資料として位置づけて保存・活用していくかという議論にもつながっていくだろう。歴史的
音源への関心が高まる現在、森川コレクションがそうした議論をけん引するモデルケースとな
ることを願ってやまない。

(北九州市立大学教授／国際日本文化研究センター客員教授)

図書館とデータベースの経済効果

山田 奨治

平成二六年度から情報管理施設長（情管長）を仰せつかっている。組織図上の情管長は、大学でいうならば附属図書館長と情報センター長と出版部門を足し合わせたような重職である。わたしのような者がなつてよいのだろうかと不安もあったが、幸い優秀なスタッフに恵まれて何とか務めている。情管長ともなると、平教授には知らされないような、さまざまな情報が伝えられる。もちろん、よい知らせも悪い知らせもある。また、思いがけず興味深い知らせもあるのです、その一端を紹介したい。

日文研が所蔵する資料の撮影や写真原板、ネット非公開の高精細デジタルデータを利用する場合は書面での申請をいただいているのだが、すでに画像データベースで公開しているデジタル画像の利用で済む場合は、メールでの簡便な申請だけで許諾している。申請があまりに多くて担当者が音を上げため、平成二六年一月から手続きを簡略化したのだ。

もちろん、一部の用途を除いて対価はいただいていない。もともと税金を使って集めた資料を、税金を使ってデジタル化したものだ。ネットで公開している画像を使ってもらうだけのことに、あらためて対価を求める理由は乏しい。思い起こせば、データベース利用に受益者負担を求める新自由主義の嵐が、日本の学術界にも吹き荒れた時代があった。オープンアクセスが叫ばれるいまとなつては、それももう過去の話

だ。

さて、データベース公開している画像の利用申請が寄せられるたびに、情管長にはその報告があがる。そのなかには、なかなか傑作な用途もある。日文研図書館では特色ある資料を収集してきた甲斐あって、学術的な書籍等への転載希望はもとより、非学術分野の書籍等でのイラストの利用や、テレビ番組での「引用」などもある。

例えば、誌名から想像するに、どうみても「通俗的」大衆誌や官能系と思えない雑誌編集部からの申請がある。この種の申請はたいいてい、当センターが誇る「艶本資料データベース」の画像を希望している。非学術分野の雑誌や図書では「怪異・妖怪画像データベース」からの画像転載もたいへん多い。

テレビ番組のなかで映したいという希望では、「風俗図絵データベース」「平安京都名所図会データベース」が比較的多いように思う。どちらも日本や京都の昔の様子を描いた画像資料で、テレビ映えのする「いい画」になるとみてもらっているようだ。

所蔵地図データベースの画像が、京都市内の分譲マンションの広告に利用されたこともある。歴史ある土地に建てられ

た物件であることを醸し出すのに、古地図は格好のイメージ素材になっているようだ。

こういった産業界からの利用は、実はたいへんな経済効果をもたらしていることはまちがいない。在京民放のテレビコマーシャルの放映料金は、一五秒一本あたり最低でも四〇万円、ゴールデンタイムなら百万円以上はする。仮に日文研の資料がその所蔵者名のテロップ入りで一五秒放送されたら、そこにはその長さのコマーシャル放映料金分の経済効果が生じる。新聞や雑誌での利用も、広告出稿料金でその経済効果を計ることができる。それらを足し合わせたら、日文研の図書館とデータベースが生み出している価値は、いったい如何ほどになるのだろうか。

マンション広告の場合、日文研の資料が醸し出したイメージが決めた手になって物件を購入したひとがひとりでもいれば、その物件の価格分の経済効果を生んだことになる。それは数千万、あるいは億に届く金額かもしれない。

余談になるが、日文研のある桂坂地区の住宅販売チラシでかつて、この街に住む子どもたちは日文研の教授から講義を受けられると宣伝されていた。隣の桂坂小学校でつづけている「出前授業」のことである。日文研のあることが、地域に

そうした付加価値を生んでいることも、忘れてはならない。だが、こうした屁理屈を考えてみても、何の役にも立たなさそうな人文・社会学系の学部など国立大学から減らせという、監督官庁の大号令に抗することはできないだろう。人文社会学系の学術機関が生み出す多様な価値に広く目配せできる政治家や官僚は、日本の学術行政からはいなくなってしまうだろうだ。

(国際日本文化研究センター情報管理施設長)

財務運用係の仕事

須田秀美・亀井祐子

私達は、管理部総務課財務運用係に所属しています。財務運用係は、旅費担当と物品担当に分かれており、私達物品担当は、物品の購入・印刷物の発注・役務、財務会計処理などを行っています。私達の仕事を簡潔にお伝えしようとあれこれ頭を巡らせてはみたものの、これといったピッタリの一言が見つかりません…。人と接することも多い仕事なので、特別

大きな力にはなれなくとも、先生方や事務職員の方々の「縁の下の力持ち」的な存在になりたいという気持ちで、毎日元気に上司の指示のもと仕事をするようにつとめています。

日文研では、書籍以外の購入・役務は財務運用係を通しての発注となり、教員発注は認められていません。先生方や各課・係から購入の依頼をうけ、物品・役務等の購入の段取り、見積・発注・納品までをするのが、主な仕事です。物品の購入と一言で言っても商品の選定、見積・発注・納品、会計処理を終えるまでに、半月から1ヶ月、時には数ヶ月の日数を要します。担当者と打ち合わせをしたり、いろいろな業者の方とお会いしたり、電話やメールでの打ち合わせや交渉、時には情報を教えていただきながら仕事を進めていきます。商品や金額、数量に間違いはないか、在庫はあるか？納期は大丈夫か等、もう数え切れないほど同じ事を繰り返しているのに、未だに緊張が走るのです。中にはとても高価だったり、珍しかったり、検品するのも恐れおおいと思う物もあり、無事納品を確認したときには、いつも以上に安堵感が広がります。

依頼をしようか、迷ってらっしゃる時に相談を受けることもあります。もちろんお役に立てる時、立てない時もありま

すが、話を伺い、相手の意向になるべく添えるよう心がけています。稀に私達のお手伝いで解決したりすると、つい台車を押す足取りも軽くなったり…。

「プリンターに紙が詰まった」といった相談もあります。プリンターの紙詰まりの頻度が増すのは、梅雨時です。ティッシュやピンセット・汚れ落とし・裏紙等を持参し、身体を変な角度に曲げながら神経を集中させて機械を傷付けないように慎重に、詰まった紙を取り除き、手をまっ黒にしながら汚れを掃除します。時にはうっかり顔をさわってしまい、小さな子供のようになつていたり。他にも「ゴミの出し方」、「シミ取り」、「ゴミの回収」、「害虫駆除剤の散布」等、多岐にわたる対応します。時に子育ての知恵や介護の経験が生きることもあり、何が役にたつかわからないものです。

また故障等があれば状況を確認し、修理を依頼する前に再度検証等し、本当に修理が必要か？何とか私たちが対処することができないか？等を確認し、いろいろな面での経費削減を心がけております。

普段の生活でも、日々アンテナを張っています。チラシや新聞等で商品情報や金額の相場をみておいたり、お店にいったときには現物を実際にみてみたり、時には業者の方から情

報を収集することも。どれぐらい役に立つかはわかりませんが、少しでもスムーズな対応ができるように、私生活でも心がけるようにしています。

購入等が決まれば、会計システム処理をして決裁をとり、納品されれば支払いに向け、高価な物品については登録等の処理をしたりします。日々の事務作業においても、一番に規則に忠実に正確に、また、効率よく作業を進めるようにしています。年末から年度末あたりには、業務量もかなりふえ、予算管理や購入の作業では時には、予算が足りない！納期に間に合わない！という夢をみて目が覚め、「夢で良かった」なんてこともあります。また、海外から研究にこられている方のための宿泊施設である日文研ハウス関係の業務もあり、備品等の管理、光熱水量の計算、請求等の業務もしています。日文研ハウスは生活するスペースのため、一般家庭と同様に、冷蔵庫、洗濯機等などの調子が悪くなったりすると、大至急対応しなければならぬことが多く、また共有スペースなどで、思いがけないことが起こったりします。ドラえもののなんでもポケットが欲しいなと思うことも。

私たちの仕事は、そうじや片付け、重たいものを運んだり、と、地味で紙の上で表せないことも多くあり、また、予定外

の業務も多く、急いでしなければならぬことがたくさんあります。その中で、少しでも効率よく、表面上だけでなくみんなにとっていい形になるよう常に心がけて、向上心をもって楽しく仕事をさせていただいております。これと違って特別なことはできない私達ですが、人とのつながりを大切に、日々どんな仕事でもやる気をもってすれば、相手も気持ちよく仕事ができると思います。教員とは、パイプのようには太く、時には細く、必要に応じた対応で研究のお手伝いできればと考えています。

日文研は自然に恵まれたところにあり、めまぐるしい毎日の中でも、ふと美しい景色に癒やされ、木々に元気をもらい、素敵な環境でお仕事できる喜びを感じています。先生方、事務職員の皆様、いつもご協力いただき、本当にありがとうございます。

大きな相談から小さな相談まで、ご遠慮なく財務運用係まで。

(国際日本文化研究センター管理部総務課
財務グループ財務運用係パートタイム職員)

共同研究

(二〇一四年一月一日～二〇一五年三月三十一日)

昭和戦後期における日本映画史の再構築

〔研究代表者〕 谷川建司、幹事 細川周平

〔共同研究員名〕

晏妮、板倉史明、井上雅雄、小川順子、木下千花、木村智哉、河野真理江、須藤遙子、富田美香、中村秀之、西村大志、柳下毅一郎、北浦寛之、長門洋平

〔海外共同研究員名〕

ミツヨ・ワダ・マルシアアノ

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一四年九月二七日

晏 妮 「戦後日本映画とアジア 冷戦下のホリティック
スと映画ビジネス」

富田美香 「一九五〇年代京都における映画興行の様態―ア

トラクションつき映画興行を中心に」

二〇一四年九月二八日

DVD上映『X年後』（伊藤英朗監督、二〇一二年、八三分）

デイスカッション「伊藤英朗監督を囲んで」

ミツヨ・ワダ・マルシアアノ 「X年後…米国パブリック・
ディプロマシーと戦後原子力映画」

〈第五回研究会〉

二〇一四年一月二二日

小川順子 「東映時代劇映画における大川橋蔵…東映スター
中心主義とファンが作り出した功罪」
長門洋平 「映画産業における『サントラ』レコードの諸問

題「初期角川映画と葉師丸ひろ子を中心に」

二〇一四年一月二三日

資料検討会、出版についての打ち合わせ

〈第六回研究会〉

二〇一五年一月三十一日

北浦寛之「大手映画会社のテレビ産業への進出―テレビ映

画製作を中心に」

木村智哉「東映動画株式会社における経営危機要因の分析

―一九七二年の合理化に至る経緯から―」

二〇一五年二月一日

中村秀之「一九五〇年代日本の映画批評と映画界―変化、

連続、亀裂」

〈第七回研究会〉

二〇一五年三月二十八日

富田美香「一九五〇年代京都における映画興行の様態

―アトラクションつき興行を中心に―その三

(一九五五年以降)」

柳下毅一郎「大蔵貢の新東宝と見世物興行」

西村大志「戦後サラリーマン映画再考―東宝を中心に―」

二〇一五年三月二十九日

出版についての意見交換及び今後の共同研究会の枠組のあ

り方についてのディスカッション

人文諸学の科学史的研究

(研究代表者 井上章一、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

今谷明、上島享、上村敏文、鶴飼正樹、内田忠賢、長田俊

樹、小澤実、小路田泰直、斎藤成也、佐藤雄基、関幸彦、

高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、永

岡崇、林淳、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安田敏

朗、若井敏明、荒木浩、伊東貴之、大塚英志、倉本一宏

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一四年九月二十七日

菊地 暁「人文研探險管見」

斎藤成也「新京都学派の研究・梅棹忠夫『ヨタバナシこそ

残るのか』」

二〇一四年九月二十八日

井上章一「桑原武夫のある一面」

内田忠賢「人類学京都学派―京大文学部地理学教室との関

わりから」

鴉飼正樹「京都大学文学部哲学科社会学講座と文化人類学の微妙な関係について」

〈第三回研究会〉

二〇一四年一月二二日

楊 際開「内藤湖南の中国観と清末変法運動」

小澤 実「戦後日本の北欧中世像―山室静・荒正人・谷口

幸男」

二〇一四年二月二三日

井上章一「フランス革命の語り方」

戦争と鎮魂

〔研究代表者〕 牛村 圭、幹事 ジョン・グリーン）

〔共同研究員名〕

今泉宜子、岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川

本玲子、金志映、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、竹村

民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、吉井

文美、吉田（古川）優貴、稲賀繁美、倉本一宏、末木文美

士、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕

〔海外共同研究員名〕

徐載坤、平松隆円、堀まどか

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一四年一月二二日

古田島洋介「語彙としての『鎮魂』・語義としての『鎮

魂』

栗原俊雄「戦没者遺骨の戦後史」『国土』を中心に」

〈第三回研究会〉

二〇一五年三月二九日

徐 載坤「日本現代詩と鎮魂」

等松春夫「総力戦と音楽―第一次世界大戦とエドワード・

エルガー―」

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討

〔研究代表者〕 劉 建輝、幹事 北浦寛之）

〔共同研究員名〕

安藤潤一郎、井村哲郎、上垣外憲一、岸陽子、呉孟晋、小

林茂、姜克実、白幡洋三郎、鈴木貞美、戦暁梅、单援朝、

塚瀬進、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸

偉、伊東貴之、稻賀繁美、井上章一、松田利彦、森洋久、石川肇、陳其松

〔海外共同研究員名〕

王中忱、徐興慶、孫江

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一四年一月二日

石川 肇 「内部資料から見る出光の大陸進出」

松宮貴之 「吉田茂と台湾の政治家―米寿のお祝いと筆墨」

二〇一四年一月三日

塚瀬 進 「自著『マンチュリア史研究―『満洲』六〇〇年の

の社会変容―』について」

孫 江 「天野郷三の『南京事件』―一枚の葉書を手がかりとして」

夢と表象―その統括と展望

〔研究代表者〕 荒木 浩、幹事 マルクス・リュッターマン

〔共同研究員名〕

安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、鍛治恵、加藤悦子、河東仁、木村朗子、笹生美貴子、仙海義之、高橋文

治、立木宏哉、玉田沙織、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松蘭斉、松本郁代、箕浦尚美、室城秀之、伊東貴之、倉本一宏、早川聞多、榎本渉、郭南燕、丹下暖子、中川真弓

〔海外共同研究員名〕

ヨーク・B・クヴェンツァー、李育娟

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一四年一月六日

ダシュ・シヨバ・ラニ 「仏教とジャイナ教における夢の概

念と表象」

宮内淳子 「宮沢賢治と夢―『銀河鉄道の夜』を中心に―」

おたく文化と戦時下・戦後

〔研究代表者〕 大塚英志、幹事 北浦寛之

〔共同研究員名〕

浅野龍哉、板倉史明、内田力、大野修一、香川雅信、菊地暁、キム・ジュニアン、木村智哉、嵯峨景子、須藤遙子、鶴見太郎、富田美香、中川譲、藤岡洋、細馬宏通、牧野守、室井康成、山本忠宏

〔海外共同研究員名〕

秦剛、マーク・スタインバーグ

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一四年十一月二十九日

浅野龍哉「『鉄扇公主』を主題とするまんが創作—アジア
的主題の継承と実践—」

キム・ジュニアン「田河水泡『人造人間』をめぐるって」

大塚英志「アトムは何故『機械化』されたか—戦時下と戦

後の結節点としての手塚治虫—」

〈第四回研究会〉

二〇一五年一月一七日

内田 力「一九五〇年代歴史紙芝居とその文脈—」

室井康成「選挙粛正運動の視覚戦略—」

〈第五回研究会〉

「学生・教員参加による日本アニメーション・まんが研究
及び教育法をテーマとする共同研究集会」

二〇一五年三月一三日

細馬通宏「研究の紹介と位置づけ、研究上の問題点—」

マーク・スタインバーグ「研究の紹介と位置づけ、研究上

の問題点—

二〇一五年三月一四日

秦 剛「研究の紹介と位置づけ、研究上の問題点—」

于 素秋「研究の紹介と位置づけ、研究上の問題点—」

キム・ジュニアン「研究の紹介と位置づけ、研究上の問題

点—

吳 新蘭「研究上の関心に基づく報告—」

陳 曦子「研究上の関心に基づく報告—」

二〇一五年三月一五日

于 智為「研究上の関心に基づく報告—」

浅野龍哉「研究上の関心に基づく報告—」

金 玫亨「研究上の関心に基づく報告—」

王 蕙林「研究上の関心に基づく報告—」

劉 晗「研究上の関心に基づく報告—」

張 君「研究上の関心に基づく報告—」

Edmond Ernest Dit Alban「研究上の関心に基づく報告—」

山本忠宏「研究上の関心に基づく報告—」

蔡 錦桂「研究上の関心に基づく報告—」

昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化的分析
——ザ・タイガースの研究

〔研究代表者〕 磯前順一、幹事 井上章一

〔共同研究員名〕

浅尾雅俊、飯田健一郎、小野善太郎、黒崎浩行、永岡崇
中村俊夫、藤本憲正、松本清、水内勇太、倉本一宏、細川
周平、北浦寛之、光平有希

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一四年一〇月一八日

辻 幸多郎「ザ・タイガース論集の出版現状について」

北浦寛之「ザ・タイガースと映画」

磯前順一「ザ・タイガースと現代思想」

黒崎浩行「データの成形について」

日本の軍事戦略と東アジア社会——日中戦争期を中心として——

〔研究代表者〕 黄 自進、幹事 劉 建輝

〔共同研究員名〕

相澤淳、浅野豊美、家近亮子、井上寿一、王柯、加藤聖
文、黒沢文貴、小菅信子、佐藤卓己、澁谷由里、姜克実、

鈴木多聞、田嶋信雄、段瑞聡、戸部良一、波多野澄雄、服
部龍二、馬曉華、松浦正孝、松重充浩、劉傑、鹿錫俊

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一四年一〇月一八日

鹿 錫俊「日米交渉期における蔣介石のシナリオ」

澁谷由里「一九三〇～四〇年代の日本における中国軍事史
研究——日野開三郎と濱口重国を中心として——」

二〇一四年一〇月一九日

馬 曉華「グローバルヒストリーの視点から見る日中戦争
——一九四三年人種関係の再編を軸に——」

〈第四回研究会〉

二〇一四年一二月二〇日

劉 建輝「満州学の構築……近代化という視野から」

王 明珂「一世紀から六世紀にかけての満州における人類
の生態およびその歴史的意義」

二〇一四年一二月二一日

田嶋信雄「戦間期日本の『西進』政策と日独防共協定——
ユーラシア課報・謀略協力の展開と挫折——」

松重充浩「一九二〇年代張作霖地方政権による現地統治の

制度的構造と展開実態―奉天省を中心事例として―

〈第五回研究会〉

二〇一五年二月二日

段 瑞聡「戦後初期蔣介石と国民政府の対日講話構想」

黒沢文貴「再考・戦後の日本近代史認識―昭和戦前期の

『戦争の構造』と『歴史の構造』をめぐって」

二〇一五年二月二日

姜 克美「台児庄戦役における日本軍の死傷者数」

高 文勝「満州事変前夜における日中関係―『革命外交』

と『堅実に行き詰まる』政策―」

日本仏教の比較思想的研究

(研究代表者 末木文美士、幹事 稲賀繁美)

〔共同研究員名〕

阿部仲麻呂、井上克人、魚住孝至、岡本貴久子、沖永宜

司、嘉指信雄、坂井祐円、坂本慎一、佐藤弘夫、島蘭進、

ミシエル・ダルシエ、永井晋、中島隆博、西平直、西村

玲、モリー・ヴァラー、シルヴィオ・ヴィータ、藤田正

勝、前川健一、吉永進一、米田真理子、阿部泰郎、滝澤修

身、ランジャンナ・ムコパディヤヤー、アントン・セビリ

ア、高橋勝幸

〔海外共同研究員名〕

アンナ・アンドレーワ、許祐盛、ジェームズ・マーク・

シールズ、鄭滢

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

『心身/身心』と『環境』の哲学―東アジアの伝統的概念

の再検討とその普遍化の試み―との合同研究会

二〇一四年一月二二日

鐘 以江「『教化』から『教育』と『宗教』へ―近世・近

代日本における『教』の歴史」

陳 継東「太鼓腹の弥勒は仏教なのか―布袋和尚伝記考」

島蘭 進「日本仏教と無常・浮き世」

二〇一四年一月二三日

西平 直「『無心』の英訳―井筒俊彦の無心理解をめぐって」

藤田正勝「表現と身体―『表現的存在』としての人間」

末木文美士「日本思想史における身体観・環境観の変容」

〈第五回研究会〉

二〇一五年一月一〇日

ランジャンナ・ムコパディヤヤー「日本山妙法寺の『西天開

「教」—アジア伝道から世界平和運動へのあゆみ」

滝澤修身「フロイスの見た日本の宗教」

二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正…過去の検証と将来への提言

〔研究代表者〕 稲賀繁美、幹事 牛村 圭

〔共同研究員名〕

今泉宜子、鶴戸聡、大西宏志、岡本光博、小川さやか、小倉紀藏、鞍田崇、呉孟晋、小崎哲哉、菰田真介、近藤高弘、澤田敬司、白石嘉治、戦暁梅、全美星、多田伊織、千葉慶、張競、テレングト・アイトル、中村和恵、西田雅嗣、西原大輔、二村淳子、波嗟栄ジェニファしょう子、橋本順光、林洋子、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、シルヴィー・ブロッソ、松原知生、クリストフ・マルケ、三原芳秋、本浜秀彦、山中由里子、山本麻友美、與那覇潤、マシュー・ラーキング、李建志、滝澤修身、山田奨治、劉建輝、磯前順一、榎本渉、フレデリック・クレインス、森洋久、王成、長門洋平、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

大橋良介、デンニツァ・ガブラコヴァ

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

二〇一四年一〇月四日

デンニツァ・ガブラコヴァ「離島と主権」

韓 敬九「海賊としての倭（寇）と洋夷…東道西器と衛正

斥邪の視点から見る和魂洋才の文化受容戦略」

二〇一四年一〇月五日

張 競「内と外から見た日本文学」

万国博覧会と人間の歴史—アジアを中心に

〔研究代表者〕 佐野真由子、幹事 井上章一

〔共同研究員名〕

石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鶴飼敦子、江原規由、川口幸也、神田孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、林洋子、増山一成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、橋爪紳也、稲賀繁美、瀧井一博、ジョン・グリーン、劉建輝、朴美貞

〔海外共同研究員名〕

青木信夫、岩田泰、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、徐蘇斌

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

国際ワークショップ「万国博覧会の歴史と未来」

二〇一四年一〇月四日

喬 兆紅「博覧会事業に関する中日比較研究」

ユク・ヨンス「閉ざされた王国から文明国家へ? —

一八九三年シカゴ万博、一九〇〇年パリ万博に展示された世紀末の朝鮮」

ジラルデッリ青木美由紀「万国博覧会のオスマン帝国と日

本——『オスマンの建築様式』(一八七三)、『稿本日

本帝国美術略史』(一九〇〇)の出版とトルコ国立宮

殿局所蔵の日本美術工芸品コレクション」

指定討論者・青木信夫

瀧井一博「岩倉使節団の『万博』体験とその後」

シビル・ギルモンド「一八八五年のニュルンベルク『万国

金工博覧会』

徐 蘇斌「中国における博覧会と博物館の創設」

畑 智子「京都博覧会について」

指定討論者・市川文彦、ウィーベ・カウテルト

二〇一四年一〇月五日

〈特別セッション…大阪万博〉

平野暁臣「いま、大阪万博に学ぶ」

川口幸也「世界の国からこんにちへ——万博美術展がみた

世界」

座談・平野暁臣、橋爪紳也、林洋子、曹建南

司会・佐野真由子

総合討論

愛・地球博記念公園(長久手市・瀬戸市)見学

二〇一四年一〇月六日

行政から博覧会協会(愛・地球博主催団体)へ出向した

方々との討論会

製作受託企業スタッフとの討論会

愛知万博に参画した市民グループとの討論会

〈第四回研究会〉

二〇一四年一二月二〇日

論集寄稿原稿の概要発表

論集編集方針および次年度の活動について

二〇一四年一二月二一日

論集寄稿原稿の概要発表

論集編集方針および次年度の活動について

植民地帝国日本における知と権力

〔研究代表者〕 松田利彦、幹事 瀧井一博

〔共同研究員名〕

飯島涉、岡崎まゆみ、小野容照、加藤聖文、加藤道也、川瀬貴也、河原林直人、栗原純、洪宗郁、慎蒼健、通堂あゆみ、長沢一恵、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

陳延媛、山本浄邦、李炯植

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一四年一〇月三日

加藤道也「植民地官僚の統治認識―時永浦三と吉村源太郎を手掛かりに―」

小野容照「メディア経験の連鎖―竹内録之助と朝鮮語雑誌―」

李 炯植「敗戦後帰還した朝鮮総督府官僚の植民地認識―」

二〇一四年一〇月四日

慎 蒼健「へ知と権力」とはどのような問題なのか―植民地衛生学に焦点をあてて―

春山明哲「岡松参太郎と台湾旧慣調査―研究回顧と『岡松

文書』以後の展望―

何 義麟「植民地台湾における台湾人有力者の対日協力―

許内の経歴を中心にして―」

宋 炳卷「崔虎鎮とその時代―」

〈第四回研究会〉

二〇一四年一二月七日

洪 宗郁「李清源の歴史研究と政治活動―」

やまだあつし「札幌農学校からの中等農業学校への就職に

ついて―台湾への技術者送り出し経路という観点から

―」

松田利彦「韓国・法院記録保存所所蔵、植民地期民事裁判判決原本について―」

長沢一恵「植民地における近代開発をめぐる諸相―朝鮮における鉱業裁判を手がかりに―」

加藤聖文「満州国の官吏養成と大同学院―」

〈第五回研究会〉

二〇一五年二月一五日

顔 杏如「風景と知識―植民地台湾における植物調査と風景叙述―」

栗原 純「台湾総督府の阿片政策―治療をめぐる諸問題―」

鄭 駿永「『犯罪者』の身体、朝鮮人の『精神』—京城帝
大精神科学教室の西大門刑務所研究」

「心身／身心」と「環境」の哲学—東アジアの伝統的概念の
再検討とその普遍化の試み—

(研究代表者 伊東貴之、幹事 榎本 渉)

〔共同研究員名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、魚住孝至、恩田裕正、垣
内景子、片岡龍、橘川智昭、権純哲、黒住眞、桑子敏雄、
河野哲也、小島毅、鍾以江、鈴木貞美、関智英、錢国紅、
高橋博巳、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、陳継東、陳
健成、土田健次郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林
文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、末木文美士、
ジョン・ブリン、劉建輝、フレデリック・クレインス、
山村奨

〔海外共同研究員名〕

黄海玉、フレデリック・ジラル、張翔、手島崇裕

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

「日本仏教の比較思想的研究」との合同研究会

二〇一四年一月二二日

鐘 以江「『教化』から『教育』と『宗教』へ—近世・新

代日本における『教』の歴史」

陳 継東「太鼓腹の弥勒は仏教なのか—布袋和尚伝記考」

島 蘭 進「日本仏教と無常・浮き世」

二〇一四年一月二三日

西平 直「『無心』の英訳—井筒俊彦の無心理解をめぐる

て」

藤田正勝「表現と身体—『表現的存在』としての人間」

末木文美士「日本思想史における身体観・環境観の変容」

マンガ・アニメで日本研究

(研究代表者 山田 奨治、幹事 荒木 浩)

〔共同研究員名〕

飯倉義之、石田佐恵子、伊藤慎吾、伊藤遊、岩井茂樹、岡
本健、金水敏、白石さや、西村大志、安井眞奈美、山中千
恵、山本冴里、油井清光、横濱雄二、吉村和真、谷川建
司、北浦寛之、宮崎康子、朴順愛、小泉友則

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一四年一〇月一日

鷺宮神社、大西茶屋他見学

二〇一四年一〇月一日

大宮ソニックシティ(さいたま市)にて「アニ玉祭」視察

〈第四回研究会〉

二〇一四年一二月一三日

作品検討「精霊の守人」

紹介者・山本冴里

二〇一四年一二月一四日

これまでの研究会を踏まえた討論

〈第五回研究会〉

二〇一五年三月二二日

作品検討「のらくろ」

紹介者・金水 敏

二〇一五年三月二二日

成果出版等についての討論

新大陸の日系移民の歴史と文化

(研究代表者 細川周平、幹事 瀧井一博)

〔共同研究員名〕

赤木妙子、アンジェロ・イシ、糸井輝子、栗山新也、小嶋

茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、フェリッペ・アウグス

ト・ソアレス・モッタ、高木(北山)眞理子、滝田祥子、

根川幸男、日比嘉高、野村(一政)史織、松岡秀明、水野

眞理子、物部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳

田利夫、吉田裕美、早稲田みな子、高橋勝幸

〔海外共同研究員名〕

エドワード・マック、森幸一

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一四年一〇月一日

野村(一政) 史織「第一次世界大戦期におけるアメリカ

化と集団像の構築…東欧系移民の日系移民の比較から

見えてくるもの」

守屋貴嗣「日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ』書評」

早稲田みな子「隠れた遺産…第二次世界大戦中の日系人収

容所における日本伝統芸能」

二〇一四年一〇月一日

日比嘉高「移民・帝国・表象——一九三二年のロサンゼ

ル・オリンピックと田中英光『オリンピックの果実』」

〈第五回研究会〉

二〇一五年一月一日

物部ひろみ「常磐ハワイアンセンターについて」

早稲田みな子「ハワイ音楽と日系アメリカ人」

二〇一五年一月二日

スエヨシ・アナ「日本からペルーへ帰国したデカセギ労働者」

者の二世がリマの日系人社会に与える影響」

佐々木剛二「ブラジル日本移民の政治、知識、徳…移民知識人をめぐる歴史民族誌」

識人をめぐる歴史民族誌」

赤木妙子「〈歴史〉を紡ぐということ―チリ移民一世の事例から―」

例から―」

日本大衆文化とナシヨナリズム

(研究代表者 朴 順愛、幹事 山田奨治)

〔共同研究員名〕

市川孝一、須藤遙子、全美星、竹内幸絵、土屋礼子、寺沢

正晴、油井清光、尹健次、吉田則昭、谷川建司、朴美貞

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一四年一〇月一八日

申 昌浩「宮城道雄と庶民的ナシヨナリズム」

寺沢正晴「戦後日本のスポーツ文化とナシヨナリズム」

二〇一四年一〇月一九日

吉田則昭「一九五〇年代におけるソビエト文化受容―文化運動と日本的なものとの結びつきを中心に―」

運動と日本的なものとの結びつきを中心に―」

〈第五回研究会〉

二〇一四年一二月六日

市川孝一「韓流ブームから嫌韓ムードへ」

二〇一四年一二月七日

土屋礼子「週刊誌に見る戦後日本のナシヨナリズム―中間報告」

報告」

油井清光「アニメをめぐるグローバル化とナシヨナルなものとのせめぎあい」

のとのせめぎあい」

〈第六回研究会〉

二〇一五年一月二四日

尹 健次「在日文化と民族意識」

朴 美貞「孫基禎とマラソン」

二〇一五年一月二五日

全美星「明治文学にみるナシヨナリズム」

(文責…研究協力課)

基礎領域研究

韓国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

近世風俗未公刊資料解説（継続）

代表者 早川聞多

概要 センター所蔵の近世風俗資料の解説および変体仮名の解説演習を行う。

古文書研究（継続）

代表者 笠谷和比古

概要 前近代の草書文字で記された古文書や日記・記録などの読解を行う。

フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせて必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

中国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 郭 南燕

概要 研究その他の業務で中国語を必要とする人に対して、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴解の習得を目的とする。

日本宗教史基礎研究（継続）

代表者 末木文美士

概要 日本宗教史に関する基礎的な問題に関して討議し、必要に応じて重要な文献の講読を行う。

中世文学講読（継続）

代表者 荒木 浩

概要 『方丈記』や『徒然草』など、日本中世文学の文献を、影印を参照し、英訳なども対比しながら精読する。

彙報

(平成二六年一〇月一日)

平成二七年三月三十一日

人事異動

◎平成二六年一〇月三十一日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 王 鍵 (中国社会科学院近

代史研究所研究員)

◎平成二六年一月三〇日 契約期間満了

外国人研究員 望月みや (ニューヨーク大学

アブダビ校美術研究所准教授)

◎平成二七年一月一日 契約

(客員)

外国人研究員 高 文勝 (天津師範大学政治

と行政学院教授)

外国人研究員 リチャード・エドガー・トラ

ンス (オハイオ州立大学教授)

外国人研究員 ケヴィン・マイケル・ドーク

(ジョージタウン大学教授)

◎平成二七年二月一日 契約

(客員)

外国人研究員 ミシエル・モール (ハワイ大

学マノア校准教授)

外国人研究員 李 容相 (又松大学教授)

◎平成二七年二月二八日 契約満了

(客員)

外国人研究員 楊 際開 (杭州師範大学国学

院専任研究員)

◎平成二七年三月三十一日 定年退職

研究部教授 笠谷和比古

研究部教授 末木文美士

文化資料研究企画室教授 早川聞多

◎平成二七年三月三十一日 契約満了

(特任研究員)

特任准教授 寺村裕史

(客員)

外国人研究員 ルチアナ・ガリアーノ (カ・

フォスカリ大学客員教授)

外国人研究員 王 成 (清華大学教授)

外国人研究員 王 明珂 (スタンフォード大

学客員研究員)

外国人研究員 朴 順愛 (湖南大学教授)

◎平成二七年三月三十一日 委嘱期間満了

(客員)

教授 飯塚 靖 (下関市立大学経済学部教授)

教授 滝澤修身 (長崎純心大学教授)

教授 御厨 貴 (東京大学先端科学技術研究

センター客員教授)

准教授 楠 綾子 (関西学院大学国際学部 准

教授)

日文研フォーラム

第二八二回「平成二六年一〇月一日(火)」

発表者 エミリア・シャロンドン (トゥー

ルーズ・ル・ミライユ大学講師/日文研外

国人研究員)

テーマ 日本が自ら日本を世界に紹介した最

初の本にみる日本の美意識について

コメンテーター 稲賀繁美教授

第二八三回「平成二六年一月二七日(木)」

発表者 スティーナ・イエェルプリン (ストックホルム大学准教授/日文研外来研究員)

テーマ 日本古典文学における隠喩の考察

——主に歌ことば、翻訳、隠喩の展開について

コメンテーター 荒木 浩教授

第二八四回 [平成二六年一月二二日(金)]

『大英博物館「春画展」報告』

発表者 アンドリュウ・ガーストル (ロンドン大学SOAS教授/日文研外国人研究員)

テーマ タブーを破る—春画研究・展示の意義

発表者 矢野明子 (ロンドン大学SOAS)

—ジャパン・リサーチ・センタールリサーチ・アソシエイト/日文研外来研究員)

テーマ 日本の春画をイギリスはどう見たか

発表者 石上阿希 (立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員)

テーマ 大英博物館春画展を受けて—日本側のリアクション

コメンテーター 早川聞多教授

第二八五回 [平成二七年一月一三日(火)]

発表者 朴 順愛 (湖南大学教授/日文研外国人研究員)

テーマ グローバル時代における日本大衆文化とその変容—大河ドラマ分析を通じて

コメンテーター 谷川建司 (早稲田大学政治経済学術院客員教授/日文研客員教授)、

山田奨治教授

第二八六回 [平成二七年二月一日(火)]

発表者 ランジャナ・ムコバディヤ (デリー大学准教授/日文研外国人研究員)

テーマ 仏教と平和主義—日本仏教の挑戦

コメンテーター 末木文美士教授

第二八七回 [平成二七年三月一日(火)]

発表者 アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ (駐日マケドニア共和国特命全権大使)

テーマ 私の日本映画研究とソフトパワー外交

コメンテーター 高橋 剣 (東映株式会社京都撮影所製作部長/京都ヒストリカ国際映画祭事務局長)、田口栄治 (国際交流基

金理事)、亀田真澄 (東京大学助教授)

木曜セミナー

第二二一回 [平成二六年一月一六日(木)]

話者 森 洋久准教授

テーマ KATSURAI—古地図 Google Mapの試み—

第二二二回 [平成二六年一月二〇日(木)]

話者 坪井秀人教授

テーマ 国文学者の戦中戦後—榊原美文の場合

第二二三回 [平成二六年一月一八日(木)]

話者 瀧井一博教授

テーマ 帝国大学とは何だったのか

第二二四回 [平成二七年一月二二日(木)]

話者 寺村裕史特任准教授

テーマ 文化資料のデジタル化と情報発信

第二二五回 [平成二七年二月一九日(木)]

話者 中町美香子機関研究員

テーマ 平安時代の内裏と平安京

Nichibunken Evening Seminar

第一九〇回「平成二六年九月四日（木）」

発表者 ゲルガナ・ペトコヴァ（ソフィア大学）
 「聖クリメント・オフリドスキ」准教授
 ／日文研外国人研究員）

テーマ SuperNATURAL Japan: Digging Out
 the Embedded Cultural Realities in Japanese
 Fairy Tales

第一九一回「平成二六年一〇月二日（木）」
 発表者 望月みや（ニューヨーク大学アブダ
 ビ校美術研究所准教授／日文研外国人研究
 員）

テーマ Yashiro's Details and the Problem of
 Place in Art History

第一九二回「平成二六年十一月六日（木）」
 発表者 エミリア・シャロンドン（トゥー
 ルーズ・ル・ミライユ大学講師／日文研外
 国人研究員）

テーマ Tree Blossoms and Rock Gardens: On
 the Duality of the Japanese Sense of Beauty

第一九三回「平成二六年十二月四日（木）」
 発表者 アレクサンドル・ベノ（立命館大学
 日本学術振興会外国人特別研究員）

テーマ Rethinking the Concept of New Reli-
 gions in Japan: The Case of Agonshū

第一九四回「平成二七年二月五日（木）」

発表者 アマウリ・A・ガルシア・ロドリゲ
 ス（エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大
 学教授／日文研国際交流基金フェロー）

テーマ The Circuits of Production, Distribu-
 tion, and Consumption as a Possible Narrative
 within Japanese Art History: Some Preliminary
 Considerations

第一九五回「平成二七年三月五日（木）」

発表者 ルチアナ・ガリアーノ（日文研外国
 人研究員）

テーマ Music as Representation: Thoughts and
 Remarks on Japanese Fluxus

学術講演会

第五八回「平成二七年三月二五日（水）」

「筈谷教授・末木教授・早川教授退任記念講
 演会 江戸を語る」

講演者 筈谷和比古教授

テーマ 江戸時代の新しい歴史像を求めて

講演者 末木文美士教授

テーマ 思想史からみた近世

講演者 早川聞多教授

テーマ 江戸絵画に見る表裏一体の表現

司会 倉本一宏教授

日文研・アイハウス連携フォーラム

第二回「平成二六年一二月一日（木）」

講演者 王 成（清華大学教授／日文研外
 国人研究員）

テーマ 越境する『大衆文学』の力なぜ中
 国で松本清張が流行するのか

第三回「平成二七年二月二日（木）」

講演者 アンドリュウ・ガーストル（ロンド
 ン大学SOAS教授／日文研外国人研究員）

テーマ 江戸時代にみるユーモア、パロディ、
 タブー―浮世絵と春画の社会的意義

一般公開

〔平成二六年一〇月三〇日(木)〕

【日文研外国人研究員大集合！——それぞれ
の日本研究——】

出演者 王 成(清華大学教授／日文研外国人研究員)、王 明珂(中央研究院歴史言語研究所特聘研究員／日文研外国人研究員)、アンドリュウ・ガーストル(ロンドン大学SOAS教授／日文研外国人研究員)、ルチアナ・ガリアーノ(カ・フォスアンドリュウ・ゴードン(ハーバード大学教授／日文研外来研究員)、エミリア・シャロンドン(トゥールーズ・ル・ミライユ大学講師／日文研外国人研究員)、陳 紅(浙江工商大学日本語文化学院講師／日文研外国人来訪研究員)、朴 正一(釜山外国語大学校教授／日文研外国人研究員)、ブライアン・ピクトリア(オックスフォード大学付属仏教研究所研究員／日文研外国

人來訪研究員)、黄 自進(中央研究院近代史研究所研究員／日文研外国人研究員)、ランジャー・ムコバディヤヤ(デリー大学准教授／日文研外国人研究員)、矢野明子(ロンドン大学SOASジャパン・リサーチ・センタリサーチ・アソシエイト／日文研外国人來訪研究員)、楊 際開(杭州師範大学国学院専任研究員／日文研外国人研究員)、王 鍵(中国社会科学院近代史研究所研究員／日文研外国人研究員)

司 会 佐野真由子准教授

【所員の新聞図書を斬る！】

講 評 末木文美士教授

出演者 小松和彦所長、井上章一副所長、荒木 浩教授、稲賀繁美教授、笠谷和比古教授、早川聞多教授、磯前順一准教授

司 会 倉本一宏教授

【シンポジウム】

「再発見・京のみやこ」

テーマ 『源氏物語』と平安の都

話 者 倉本一宏教授

テーマ 知られざる中世京都の地図

話 者 榎本 渉准教授

テーマ 古地図の作り方——京都を中心に

話 者 森 洋久准教授

テーマ 町家と西洋館

話 者 井上章一副所長

司 会 笠谷和比古教授

伝統文化芸術総合研究プロジェクト公演会

〔平成二七年二月一七日(火)〕

【能楽と西洋オペラとの統合の試み——楽劇

『保元物語』をめぐる——】

講演者 笠谷和比古教授

テーマ 楽劇『保元物語』と制作趣旨

講演者 武内基朗(作曲家)

テーマ オペラ版『保元物語』の楽曲解説と

演奏

国際研究集会

第四六回〔平成二七年二月二〇日(金)〕

二二日(土)】

テーマ 比較思想から見た日本仏教

研究代表者 末木文美士教授

第四七回【平成二七年三月一日(日)】～三日

【(火)】

テーマ 夢と表象―その国際的・学際的研究

展開の可能性

研究代表者 荒木 浩教授

公開講演会

【海外シンポジウム】【平成二六年十一月一日

日(火)】

テーマ 映画史のなかの太秦

講演者 上野隆三(東映京都撮影所殺陣師・

東映剣会特別会員)、大野裕之(日本チャッ

プリン協会会長/脚本家/プロデュー

サー)、小川順子(中部大学人文学部・大

学院国際人間学研究科准教授)

司 会 細川周平教授

【第四七回国際研究集会】【平成二七年三月二

日(月)】

「夢を観る／夢を聴く―夢の文化と芸術世界

―」

テーマ 夢と表象研究の展望―日本古典文学

の視点から

講演者 荒木 浩教授

テーマ 作曲された悪夢

講演者 伊東信宏(大阪大学教授)

テーマ 西洋美術における夢

講演者 高階秀爾(大原美術館館長/東京大

学名誉教授)

司 会 マルクス・リュッターマン准教授

海外シンポジウム

【平成二六年十一月一日(火)】～三日(木)】

テーマ 新領域・次世代の日本研究

場 所 国際日本文化研究センター

代表者 劉 建輝教授、瀧井一博教授

海外ワークショップ等

【平成二六年十一月二五日(火)】

テーマ 日本関連在外資料調査研究事業「近

代日本と張家口」

場 所 中国・清華大学

代表者 劉 建輝教授

【平成二七年二月二五日(水)】

テーマ 日本大衆文化に関する通時的研究の

国際的展開

場 所 韓国・漢陽大学校

代表者 松田利彦教授

【平成二七年三月二三日(月)】

テーマ 日本大衆文化に関する通時的研究の

国際的展開

場 所 中国・清華大学

代表者 劉 建輝教授

シンポジウム

第一二〇回【平成二六年一〇月二九日(水)】

主宰者 劉 建輝教授

テーマ 交錯する外交と貿易―明清交替期前

後の東アジア三国関係

第一二二回【平成二六年十一月五日(金)】

主宰者 坪井秀人教授

テーマ 言葉の境界をこえる 詩とその翻訳
をめぐって

第一二二回 「平成二七年一月二〇日(土)」

一日(日)】

主宰者 小松和彦所長

テーマ 怪異・妖怪文化研究の現在

第一二三回 「平成二七年二月七日(土)〜八

日(日)】

主宰者 倉本一宏教授

テーマ 日本古代の地域と交流

第一二四回 「平成二七年三月一三日(金)〜

一五日(日)】

主宰者 大塚英志教授

テーマ 学生・教員参加による日本アニメー

ション・まんが研究及び教育法をテーマと

する共同研究集会

第一二五回 「平成二七年三月二四日(火)」

主宰者 瀧井一博教授

テーマ 記憶の改変―「私は貝になりたい」

と記憶の政治学

レクチャー

第一四五回 「平成二七年三月二〇日(金)」

発表者 ティル・ワインガートナー(イン

ディペンデント・スカラー)

テーマ 「女性お笑い芸人」という存在―男

性中心のお笑いの世界で女性は人を笑わせ

ることができるか―

主宰者 山田奨治教授

会議

運営会議

第三五回 平成二六年一月二二日(金)

第三六回 平成二七年 三月一三日(金)

調整会議

第二一九回 平成二六年一〇月 一日(水)

第二二〇回 平成二六年一〇月二五日(水)

第二二一回 平成二六年十一月 五日(水)

第二二二回 平成二六年十一月二八日(火)

第二二三回 平成二六年十二月 三日(水)

第二二四回 平成二六年十二月二七日(水)

第二二五回 平成二七年 一月 七日(水)

第二二六回 平成二七年 一月二一日(水)

第二二七回 平成二七年 二月 四日(水)

第二二八回 平成二七年 二月二八日(水)

第二二九回 平成二七年 三月 四日(水)

第二三〇回 平成二七年 三月二七日(水)

センター会議

第二一九回 平成二六年一〇月 二日(木)

第二二〇回 平成二六年一〇月二六日(木)

第二二一回 平成二六年十一月 六日(木)

第二二二回 平成二六年十一月二〇日(木)

第二二三回 平成二六年十二月 四日(木)

第二二四回 平成二六年十二月二八日(木)

第二二五回 平成二七年 一月 八日(木)

第二二六回 平成二七年 一月二二日(木)

第二二七回 平成二七年 二月 五日(木)

第二二八回 平成二七年 二月二九日(木)

第二二九回 平成二七年 三月 五日(木)

第二三〇回 平成二七年 三月二九日(木)

外国人来訪者

平成二六年一〇月一〇日 国際交流基金関西

国際センター・平成二六年度専門家日本語

研修（文化・学術）一行

平成二七年三月九日 アンドリヤナ・ツヴェ

トコピッチ（駐日マケドニア共和国特命全

権大使）

海外渡航

坪井秀人 教授

目的 ウェスタン・ワシントン大学、

ニューヨーク大学、コロンビア大学にて学

会参加及びワークショップ参加

目的国 アメリカ

期間 平成二六年一〇月九日～一七日

荒木 浩 教授

目的 韓国外国語大学校にてシンポジウム

参加

目的国 韓国

期間 平成二六年一〇月一〇日～一三日

瀧井一博 教授

目的 ペンシルバニア大学にてシンポジウ

ム参加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二六年一〇月一六日～二二日

郭 南燕 准教授

目的 ペンシルバニア大学にてシンポジウ

ム参加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二六年一〇月一六日～二二日

末木文美士 教授

目的 韓国外国語大学校にてシンポジウム

参加、発表及び研究打合せ

目的国 韓国

期間 平成二六年一〇月二四日～二七日

荒木 浩 教授

目的 中国人民大学にてシンポジウム参加

目的国 中国

期間 平成二六年一〇月二四日～二八日

松田利彦 教授

目的 翰林大学校、ソウル大学校医科大

学、提岩里三・一運動殉国記念館にて研究
会参加、発表及び資料調査

目的国 韓国

期間 平成二六年一〇月三〇日～十一月四日

坪井秀人 教授

目的 ゲーテ・インステイトゥート東アジ

ア支部、漢陽大学校比較歴史文化研究所に

てシンポジウム参加及び発表

目的国 韓国

期間 平成二六年十一月五日～九日

郭 南燕 准教授

目的 上海図書館、浙江図書館、浙江工商

大学日本語文化学院にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二六年十一月一三日～二一日

パトリシア・フィスター 教授

目的 サンディエゴ・コンベンションセン

ターにて学会参加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二六年十一月二〇日～二五日

劉建輝 教授

目的 清華大学、張家口市内にてシンポジウム参加、発表及び現地調査

目的国 中国

期間 平成二六年一月二四日〜二八日

伊東貴之 教授

目的 中央研究院近代史研究所にて講演、講義、史料調査及び研究打合せ

目的国 台湾

期間 平成二六年一月二日〜二二日

荒木浩 教授

目的 ベトナム国家大学ホーチミン市校人
民社会科学大学にて講義及び研究指導

目的国 ベトナム

期間 平成二六年一月二三日〜平成二七年一月六日

榎本涉 准教授

目的 温嶺清港鎮、楚門鎮、玉環庁城跡等
にて史跡調査

目的国 中国

期間 平成二六年一月二九日〜二月六日

北浦寛之 助教

目的 フィリピン大学デイリマン校にて資料調査

目的国 フィリピン

期間 平成二六年一月七日〜一二日

細川周平 教授

目的 延世大学にてシンポジウム参加及び発表

目的国 韓国

期間 平成二六年一月一日〜一四日

パトリシア・フィスター 教授

目的 アンコールワット、アンコールトム、
ロリュオス遺跡等にて現地調査

目的国 カンボジア

期間 平成二六年一月一九日〜二四日

郭南燕 准教授

目的 上海図書館にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二六年一月三一日〜平成二七年一月七日

坪井秀人 教授

目的 ワシントン大学にて研究、講義及び講演

目的国 アメリカ

期間 平成二七年一月六日〜三月六日

稲賀繁美 教授

目的 ゲッチンゲン大学にてコロキウム参加、
Verlag Königshausen & Neumannにて
研究打合せ、パリ日本文化会館にて講演会

参加

目的国 ドイツ、フランス

期間 平成二七年一月二日〜二五日

佐野真由子 准教授

目的 ゲッチンゲン大学にてコロキウム参加

目的国 ドイツ

期間 平成二七年一月三一日〜一八日

松田利彦 教授

目的 ソウル大学校にて資料調査及び講演

目的国 韓国

期間 平成二七年一月一八日〜二〇日

大塚英志 教授

目的 Touhouse Manga にてワークショップ
開催、アンダレーム国際漫画祭、AAA
日本語学校等にて視察

目的国 フランス

期間 平成二七年一月二五日〜二月四日

稲賀繁美 教授

目的 漢陽大学にてシンポジウム参加

目的国 韓国

期間 平成二七年二月五日〜八日

佐野真由子 准教授

目的 イギリス国立公文書館、ヴィクトリア
ア&アルバート美術館、大英図書館にて資

料閲覧及び情報収集

目的国 イギリス

期間 平成二七年二月一日〜二二日

小松和彦 所長

目的 漢陽大学にて基幹研究プロジェクト
に係る座談会参加

目的国 韓国

期間 平成二七年二月二四日〜二六日

井上章一 副所長

目的 漢陽大学にて基幹研究プロジェクト
に係る座談会参加

目的国 韓国

期間 平成二七年二月二四日〜二六日

荒木浩 教授

目的 漢陽大学にて基幹研究プロジェクト
に係る座談会参加

目的国 韓国

期間 平成二七年二月二四日〜二六日

松田利彦 教授

目的 漢陽大学にて基幹研究プロジェクト
に係る座談会参加

目的国 韓国

期間 平成二七年二月二四日〜二六日

山田奨治 教授

目的 漢陽大学にて基幹研究プロジェクト
に係る座談会参加

目的国 韓国

期間 平成二七年二月二五日〜二六日

磯前順一 准教授

目的 ブカレスト大学、ヨーロッパ中央大
学にてシンポジウム参加、講演及び研究交流

目的国 ルーマニア、ハンガリー

期間 平成二七年二月二六日〜三月六日

榎本涉 准教授

目的 イモギリ陵墓、ポロブドゥル遺跡、
プランバナン遺跡等にて現地調査

目的国 インドネシア

期間 平成二七年二月二八日〜三月六日

細川周平 教授

目的 ヴェネチア大学、ルイス・ビジネ
ス・スクール、ナポリ東洋大学等にて学会

参加、発表及び総研大広報活動

目的国 イタリア

期間 平成二七年二月二八日〜三月一三日

劉建輝 教授

目的 国立台湾大学日本研究中心にて
フォーラム参加及び発表

目的国 台湾

期間 平成二七年三月四日〜七日

大塚英志 教授

目的 四川外国語大学にてシンポジウム参加、発表及び大足石刻見学

目的国 中国

期間 平成二七年三月六日～一日

マルクス・リュッターマン 准教授

目的 ドイツ国立図書館、テュービンゲン

大学、フンボルト大学にて史料調査、シンポジウム参加、発表及び研究打合せ

目的国 ドイツ

期間 平成二七年三月九日～三一日

小松和彦 所長

目的 清華大学にて基幹研究プロジェクトに係るワークショップ参加

目的国 中国

期間 平成二七年三月二日～二四日

井上章一 副所長

目的 清華大学にて基幹研究プロジェクト

に係るワークショップ参加

目的国 中国

期間 平成二七年三月二日～二四日

荒木 浩 教授

目的 清華大学にて基幹研究プロジェクト

に係るワークショップ参加

目的国 中国

期間 平成二七年三月二日～二四日

劉 建輝 教授

目的 清華大学にて基幹研究プロジェクト

に係るワークショップ参加

目的国 中国

期間 平成二七年三月二日～二四日

細川周平 教授

目的 清華大学にて基幹研究プロジェクト

に係るワークショップ参加

目的国 中国

期間 平成二七年三月二日～二四日

ジョン・ブリーン 教授

目的 シェラトン・シカゴホテル&タワーにてシンポジウム参加、情報収集及び広報活動

報告活動

目的国 アメリカ

期間 平成二七年三月二五日～三〇日

郭 南燕 准教授

目的 シェラトン・シカゴホテル&タワーにてシンポジウム参加、情報収集及び広報活動

報告活動

目的国 アメリカ

期間 平成二七年三月二六日～三一日

パトリシア・フィスター 教授

目的 シェラトン・シカゴホテル&タワー、デポール大学にてシンポジウム参加、広報活動及び研究打合せ

広報活動及び研究打合せ

目的国 アメリカ

期間 平成二七年三月二六日～四月一日

訃報

杉本秀太郎本センター名誉教授が、二〇一五年五月二七日に逝去されました。
享年八四。
謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

所員活動一覽（二〇一四年一月一日～二〇一五年三月三十一日）

荒木 浩

● 著書

『高等学校 古典B』（伊井春樹他と共著、富永一登他と共編）第一学習社 二〇一五年二月 四一六頁

『高等学校 古典A 大鏡・源氏物語・諸家の文章』（伊井春樹他と共著、富永一登他と共編）第一学習社 二〇一五年二月 一九二頁

● 論文

「かへりきにける阿倍仲麻呂―『土左日記』異文と『新唐書』―」倉本一宏編『日記・古記録の世界』思文閣出版 二〇一五年三月 三八三～

三九六頁

「阿倍仲麻呂婦朝伝説のゆくえ―『新唐書』と『今昔物語集』そして『土左日記』へ」劉建輝編『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題

「ベトナムシンポジウム 二〇一三」『国際日本文化研究センター』二〇一五年三月 四五～五八頁

● その他の執筆活動

「背伸びと軽さの限界点―海外で古典を伝えること」『リポート笠間』五七号 笠間書院 二〇一四年一月 二二～二六頁

「夢―古人は『夢』といかにしてつきあってきたか―」『怪』vol. 0043 株式会社KADOKAWA 三〇一四年一月 三四～三七頁

磯前順一

● 著書

『ザ・タイガース研究論―昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析』（黒崎浩行と共編著）近代映画社 二〇一五年三月

二一〇頁

伊東貴之

● 論文

「清朝考証学の再考のために——中国・清代における『尚書』をめぐる文献批判とその位相、あるいは、伝統と近代、日本との比較の視点から——」
 笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版 二〇一五年三月 六〇九〜六二四頁

● その他の執筆活動

「海外文学・文化回顧二〇一四『中国』とは何か？／どう向き合うべきか？——更新しつつ、回帰する、古くて新しい問い」『図書新聞』第
 三一八七号 二〇一四年二月二〇日号

稲賀繁美

● 論文

「『あいだ』はどこから出現したのか？『あいだ』には何が堆積するのか？——日本の木造建築をめぐるふたつの国際シンポジウムから」(上)
 『あいだ』二一六号(連載第一〇五) 二〇一四年一月 二二〜二五頁、(下) 二一七号(連載第一〇六) 二〇一四年一月 二五〜二九頁
 「生皮を剥がれた『パッターモン』——烙印と脱皮あるいはグローバル時代の商標と複製権 赤瀬川原平に捧げる——漢陽大学校『グローバル時代と東アジアの表象』会議(二〇一五年二月六〜七日)より」『あいだ』二一八号(連載第一〇七) 二〇一五年二月 三二〜三五頁
 「十二支 未——『牧畜の異郷』の家畜 日本美術における羊と、その代理としての山羊」『あいだ』二一九号(連載第一〇八) 二〇一五年三月 一八〜二三頁

「表現主義と気韻生動——北清事変から大正末年に至る橋本関雪の軌跡と京都支那学の周辺」『日本研究』第五一集 国際日本文化研究センター
 二〇一五年三月 九七〜一二五頁

「画中画雑考」『人間文化研究機構研究』『画中画の世界』(The Cosmos in *Gakuyū-ga: Pictures in Pictures*) 研究会議事録』国立民族学博物館
 二〇一五年三月(頁表記なし)

「翻訳と憑依あるいは翻訳の骨折と骨折の翻訳」『比較日本学教育研究センター研究年報』第一一号 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター

二〇一五年三月 七四～九四頁

●その他の執筆活動

「序文」『うつわ(器)と「うつし(写)」うつろいゆく形の生命…モノのかたちの霊的伝幡をめぐる新たなパラダイムにむけて』展示会冊子
«Receptacle du passage: ou la vie transitoire des formes et ses empreintes: vers un nouveau paradigme de la transmission spirituelle des formes physiques» du 20 au 24 janvier 2015, Maison de la culture du Japon à Paris, Halle d'accueil (rez-de-chaussée) パリ日本文化会館

「フランス的知性の裏切り」『日仏文化』八四号「浜沢・クロード賞三〇周年記念号」日仏会館 二〇一五年三月 七二～七四頁

「台湾における満州地域文化研究の現状警見…備忘録ノート」郭南燕編『世界の日本研究二〇一四 日本研究の隆盛』国際日本文化研究センター

二〇一五年三月 一七七～一八六頁

「文化科学研究科 学術交流フォーラム2014 成果警見と将来への展望」総合研究大学院大学文化科学研究科平成二六年度学生企画委員編

『総合研究大学院大学 文化科学研究科学術交流フォーラム二〇一四 活動報告書』総合研究大学院大学文化科学研究科 二〇一五年三月

一二五～一二六頁

井上章一

●著書

『現代の建築家』エーディーエー・エディタ・トーキョー 二〇一四年一月二五日 五〇四頁

『性欲の研究 東京のエロ地理編』（三橋順子と共編）平凡社 二〇一五年三月 二八八頁

『建築と権力のダイナミズム』（御厨貴と共編）岩波書店 二〇一五年三月 三四二頁

『DVD 京都・祇園祭～至宝に秘められた謎～』（栗山千明・小倉久寛と共演）NHKエンタープライズ 二〇一五年三月

●その他の執筆活動

「書評 鈴木了二著『寝そべる建築』」『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一四年一〇月一日

「書評 赤川学著『明治の「性典」を作った男』」『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一四年一〇月二二日

- 「都市と建築」猪木武徳・マルクス・リュッターマン編書『近代日本の公と私、官と民』NTT出版 二〇一四年一〇月 三八四〜三九九頁
- 「負けおしみと勝ちまどい」共同配信 二〇一四年一月上旬
- 「書評 池川玲子著『ヌードと愛国』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一四年一月二日
- 「書評 犬の名前『ポチ』 幕末以後に登場したピジン英語説 仁科邦男著『犬たちの明治維新 ポチの誕生』『週刊ポスト』二〇一四年二月一四日号
- 「マンガは光琳を超える」公益財団法人サントリー文化財団・アステイオン編集委員会編『アステイオン』八一 二〇一四年一月
- 「中島岳志が、『中村屋のボース』で、ふれなかったある一点について」『書磐・梁山泊月例読書会』二〇一四年一月
- 「書評 佐々木克著『幕末史』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一四年二月三日
- 「帯」岡田暁生・フィリップ・ストレンジ著『すごいジャズには理由がある』第三版 アルテスパブリッシング 二〇一四年二月
- 「書評 玉木俊明著『海洋帝国興隆史』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一四年二月二四日
- 「回顧二〇一四 私の三冊」『日本経済新聞』 二〇一四年二月二八日
- 「顔の値段―男と女のあいだには― 現代風俗研究会年報第三四号『かお―現代風俗』国際文化学園国際文化出版局 二〇一四年二月
- 「和をもって尊しとする」民族の街並みとは思えない光景『京都新聞』 二〇一五年一月一日
- 「中年からの『音楽学習者』へ」『週刊ポスト』二〇一五年一月九日号
- 「書評 佐々木敦著『ニッポンの音楽』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一五年一月二日
- 「書評 芳醇馥郁たる人文学の香りが堪能できる文芸史研究書 前田恭二著『絵のように―明治文学と美術』『週刊ポスト』二〇一五年一月三〇日号
- 「書評 小泉和子編『昭和の結婚』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一五年二月一八日
- 「あの日・あの味 マンガとカレー」『望声』二〇一五年三月号 東海教育研究所 二〇一五年二月
- 「目利き二九人が選ぶ二〇一四年私のオススメ新書」『中央公論』二〇一五年三月号 二〇一五年二月
- 「書評 輪島裕介著『踊る昭和歌謡』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一五年三月一日

「タイガースという名がうかぶまで」磯前順一・黒崎浩行編『ザ・タイガース研究論—昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析』近代映画社 二〇一五年三月 一六八〜一六九頁

「嵯峨に住む子の誇りと寂しき」『週刊朝日』 二〇一五年三月二〇日

「エッチな街の盛衰史」「オロフ・エリクソン・ウィルマンに、井上筑後守政重がときめいた日のこと」「対談 原武史×井上章一」「エロ地理三題噺——皇居前広場、電車の痴漢、団地妻」井上章一・三橋順子編『性欲の研究 東京のエロ地理編』平凡社 二〇一五年三月

「あとがき」御厨貴・井上章一編『建築と権力のダイナミズム』岩波書店 二〇一五年三月 三二五〜三二九頁

「書評 芸妓学校も手がけた上方の老舗料亭に息づく『志』」神崎宣武者『大和屋物語』『週刊ポスト』二〇一五年三月二七日号

「都市と建築に、どういう歴史を感じるか」『建築と日常』三・四合併号 二〇一五年三月

「ベリーがくるまでは、やはり鎖国である—オランダ商館日記から—」倉本一宏編『日記・古記録の世界』思文閣出版 二〇一五年三月

「東南アジアの民族建築から、日本列島の建築史を読みなおす」劉建輝編『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題』「ベトナムシンポジウム

二〇一三」『国際日本文化研究センター』二〇一五年三月 九七〜一〇二頁

「書評 島蘭進ほか編『コスモロジーの「近世」』」他書評四点 共同通信文化部編『書評大全』三省堂 二〇一五年三月

榎本 涉

● 論文

「建長寺船の派遣とその成果」村井章介編『東アジアのなかの建長寺 宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地』勉誠出版 二〇一四年一月
二〇〇〜二二二頁

「日記と僧伝の間—『空華日用工夫略集』の周辺—」倉本一宏編『日記・古記録の世界』思文閣出版 二〇一五年三月 八五〜九七頁

● その他の執筆活動

「書評 檀上寛著『明代海禁—朝貢システムと華夷秩序』」『日本史研究』六二九号 二〇一五年一月 四九〜五七頁

郭南燕

● 著書

『世界の日本研究二〇一四 日本研究の隆盛』（編集）国際日本文化研究センター 二〇一五年三月

● 論文

「大正博覧会の『台湾館』の観方―志賀直哉を中心に―」張季琳編『日本文学における台湾』中央研究院人文社會科學研究中心 二〇一四年一〇月 二〇九〜二一四頁

「外国人の日本語文学―国際語への歩み―」『比較日文学教育研究センター研究年報』第一号 お茶の水女子大学比較日文学教育研究センター 二〇一五年三月 六五〜七三頁

「上海語話者の『言文不一致』舌を肥やし、耳を養う」阿部健一監修『五感／五環 文化が生まれるとき』昭和堂 二〇一五年三月 五二〜五七頁

北浦寛之

● 論文

「『木島則夫ハブニング・ショー』の記録」『ザ・タイガースと映画』磯前順一・黒崎浩行編『ザ・タイガース研究論―昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析』近代映画社 二〇一五年三月 四二〜四三頁、一二四〜一三〇頁

「時代劇映画における『立回り』の転換点―黒澤作品の以前と以後」劉建輝編『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題』〔ベトナムシンポジウム 二〇一三〕国際日本文化研究センター 二〇一五年三月 一五二〜一五八頁

倉本一宏

● 著書

『人があるく 紫式部と平安の都』吉川弘文館 二〇一四年一〇月 一五〇頁

『平安朝 皇位継承の闇』角川学芸出版 二〇一四年二月 二〇八頁
『日記・古記録の世界』（編著）思文閣出版 二〇一五年三月 七七七頁

● 論文

「古記録の裏書について―特に『御堂関白記』自筆本について―」『日記・古記録の世界』思文閣出版 二〇一五年三月 一三五～一七四頁
● その他の執筆活動

「カラとコマ」―平安時代の異国『国立歴史民俗博物館国際企画展示「文字がたなぐ―古代の日本列島と朝鮮半島―」図録解説』二〇一四年
一〇月 二〇九頁

「紫式部と『源氏物語』をめぐる」『本郷』No. 114 吉川弘文館 二〇一四年一月 八～一〇頁

「歴史に親しむ 平安貴族は激務の毎日」『ラジオ深夜便』二〇一四年二月号 五二～六二頁

「撰関期古記録データベースをめぐる」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一九二集 二〇一四年二月 一八三～一九二頁

「近衛家の遺した日記、『御堂関白記』が世界記憶遺産になりました」『婦人画報』二〇一五年一月号 一二〇～一二四頁

「序に代えて―日記と古記録について―」『跋語に代えて―日記の総合的研究『The Synthetic Researches of Japanese Diaries』について』倉本

一宏編『日記・古記録の世界』思文閣出版 二〇一五年三月 i～vii頁、七五九～七六三頁

「『レコ室からこんばんは』から『日文研』五四号 二〇一五年三月 三二～三八頁

フレデリック・クレインス

● 論文

「オランダ商館長と將軍謁見―野望、威信、挫折」筈谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版 二〇一五年三月 五五～五七八頁

「『ファブリカ』にみる科学と芸術」『ヴェサリウス「ファブリカ」「エピトメ」解題』雄松堂書店 二〇一五年三月 一二～二五頁

佐野真由子

● 論文

「幕末最終章の外交儀礼」笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版 二〇一五年三月 六四七〜六七九頁

● その他の執筆活動

「文化遺産の『国際的』保護——何が正しいのか」『月刊みんぱく』二〇一五年三月号（第三九卷第三号）一四〜一五頁

小松和彦

● 著書

『妖怪ランキング大辞典』（飯倉義之と共同監修）株式会社カンゼン 二〇一四年二月 一九二頁

『ジャパノロジー・コレクション 妖怪 YOKAI』（監修）株式会社KADOKAWA 二〇一五年一月 二〇六頁

『宝島SUGOI文庫 日本の妖怪』（飯倉義之と共同監修）宝島社 二〇一五年三月 一三九頁

『異人論とは何か——ストレンジャーの時代を生きる——』（山泰幸と共編著）ミネルヴァ書房 二〇一五年三月 三四四頁

● 論文

「序 妖怪研究の新たな出発にむけて——若干の回顧と展望」『国際研究集会報告書第四五集 「怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から」 国際日本文化研究センター 二〇一五年一月 九〜一五頁

「いざなぎ流の神の表象——『自然』の擬人化を考える——」人間文化研究機構連携研究「自然と文化」事務局編『大学共同利用機関法人人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度成果報告書』大学共同利用機関法人人間文化研究機構

二〇一五年二月 一七九〜一九一頁

「教派神道と宗教者・芸能者」島蘭進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教 近世から近代へ四 勸進・参詣・祝祭』春秋社

二〇一五年三月 一七六〜二〇七頁

「はしがき」山泰幸・小松和彦編著『異人論とは何か——ストレンジャーの時代を生きる——』ミネルヴァ書房 二〇一五年三月 i〜iii頁

●その他の執筆活動

「書評 『道化の民俗学』『道化的世界』『文化と両義性』」真島一郎・川村伸秀編『山口昌男 人類学的思考の沃野』東京外国語大学出版会 二〇一四年一〇月

「インタビュー 妖怪の系譜 なぜ日本人に愛され続けるのか」『日経エンタテイメント!』二〇一四年二月号 日経BP社 二〇一四年一月

「近藤雅樹さんの思い出」大國正美・水口千里編『魅せる!超フォークロア―近藤雅樹ワールドの探検―』神戸新聞総合出版センター 二〇一四年一二月

「インタビュー “引き出し”豊富な文化 妖怪研究の第一人者 小松和彦氏」『福井新聞』（朝刊）二〇一五年一月一日

「多摩丘陵の狸たちは敗れたが……」『ジブリの教科書八 総天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ』文藝春秋 二〇一五年一月

「『怪異』概念をめぐる覚え書き」天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと凶像から探る怪異・妖怪の世界』勉誠出版 二〇一五年三月

「インタビュー 補論 異人論の時代」山泰幸・小松和彦編著『異人論とは何か―ストレンジャーの時代を生きる―』ミネルヴァ書房 二〇一五年三月

瀧井一博

●その他の執筆活動

「政治学の古典を読む（九） 明治人が読んだトクヴィル トクヴィル・松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』岩波文庫 二〇〇五〜二〇〇八年」『究』一月号（通巻第四四号）ミネルヴァ書房 二〇一四年一月 四四〜四五頁

「政治学の古典を読む（二〇） 日本政治（学）の泥臭さ 丸山眞男『現代政治の思想と行動』（増補版）未来社 一九六四年」『究』二月号（通巻第四七号）ミネルヴァ書房 四四〜四五頁

坪井秀人

●論文

「三好達治と戦争」『昭和文学研究』第六九集 昭和文学会 二〇一四年九月 二四〇三五頁
 「戦中戦後の跨ぎ方——〈国文学〉教育Ⅱ研究の場合——」『文学』第一五巻・第五号（二〇一四年九・一〇月号）岩波書店 二〇一四年九月
 六七〜八四頁

パトリシア・フィスター

●その他の執筆活動

“Book Review: *Hell-bent for Heaven in Tatemana mandara: Painting and Religious Practice at a Japanese Mountain*, written by Caroline Hirasawa,”
Journal of Religion in Japan 4: 1, 2015, pp. 70–73.

ジョン・ブリン

●論文

「靖国・関於戦後の天皇与神社」刘岳兵編著『日本的宗教与历史思想——以神道藻为中心』天津人民出版社 二〇一五年一月

●その他の執筆活動

「現代の言葉 神社と祭りの一〇月」『京都新聞』（夕刊）二〇一四年一〇月二〇日

「近代的聖地としての伊勢」神道国際学会編『出雲と伊勢—古代王権と聖なる空間—遷宮記念・国際神道セミナー』神道国際学会 二〇一四年
 一一月

「現代の言葉 降誕祭」『京都新聞』（夕刊）二〇一四年十二月一九日

「神社巡り④ 栗田神社」『神道フォーラム』Vol.50（平成二七年二月一日号）特定非営利活動法人神道国際学会 八頁

「書評 笠谷和比古著『武士道—侍社会の文化と倫理』エヌティティ出版 二〇一四年二月刊」『神道フォーラム』Vol.50（平成二七年二月一日
 号）特定非営利活動法人神道国際学会 九頁

「現代の言葉 京都の中の伊勢」『京都新聞』（夕刊）二〇一五年三月一六日

細川周平

● 論文

“音楽 Ongaku, Onkyō/Music, Sound.” *Review of Japanese Culture and Society* Vol. XXV December 2013 (Working Words: New Approaches to Japanese Studies), International Center for the Promotion of Art and Science (JICPAS), Josai University, pp. 9–20.

● その他の執筆活動

「月に託す」『新内志賀の会』語りの系譜Ⅲ プログラム』京都芸術センター 二〇一四年十一月

「書評 小沼純一『柴田南雄著作集第一巻』(国書刊行会)」「週刊読書人」二〇一四年十一月四日号

「CD解説『シカラムータライブ二〇一四』」ディスクユニオン 二〇一四年十一月

「随筆 リカルド宇江木からの手紙」『ふろんていら』四三号 二〇一四年二月 二九〜三二頁

「シンポジウム 音楽批評に何ができるのか?」『平成二六年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業 お茶の水女子大学」ナレッジマネジメント力を核とするアートマネジメントスタッフの育成』事業報告書』お茶の水女子大学アートマネジメント事業推進室 七三〜九三頁

「時熟し、万感の思い込めてーザ・タイガース二〇一三(二〇一三年一月一七日、京セラドーム大阪)」『毎日新聞』二〇一三年二月二五

日付記事再録 磯前順一・黒崎浩行編著『ザ・タイガース研究論ー昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析』近代映画社

二〇一五年三月 一八五頁

松田利彦

● 著書

『植民地裁判資料の活用…韓国法院記録保存所所蔵・日本統治期朝鮮の民事判決文資料を用いて』(岡崎まゆみと共編著) 国際日本文化研究セン

ター 二〇一五年三月 一〇四頁

● 論文

「朝鮮学校の最近の变化를 둘러싼 諸問題」(韓国語) 청암대학교 재일코리아연구소編『재일코리아의 生活 文化와 變容』図書出版ソニン

二〇一四年一〇月 一〇五〜一三三頁

「志賀潔と植民地朝鮮」翰林大學校日本學研究所編『翰林日本学』第二五輯 翰林大學校日本學研究所 二〇一四年一二月 五〜三二頁（韓国語版は三三〜五八頁に所収）

【解説】朝鮮総督府初期の日本人官吏―形成過程・構造・心性』『東洋文化研究』第一七号 学習院大学東洋文化研究所 二〇一五年三月 一〇五〜一四九頁

●その他の執筆活動

「書評 トッド・ヘンリー著『ソウルを同化する―日本の支配と植民地朝鮮における公共空間の政治学 一九一〇〜一九四五年』」『日本研究』第五一集 二〇一五年三月 一九一〜一九五頁

山田奨治

●論文

「日本文化にみるコピペのルール」川上量生監修『角川インターネット講座四 ネットが生んだ文化 誰もが表現者の時代』株式会社KADOKAWA 二〇一四年一〇月 二〇九〜二三五頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 現代模倣を斬る」『WASEDA LINKS』vol. 29 二〇一四年一〇月

「コメント サルッ自分撮り、写真 著作権は誰のもの？」『讀賣新聞』二〇一四年一二月二日

「第三回書資料館（映像音響館）が竣工」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』No. 90 二〇一四年一二月

「書評 寒川恒夫著『日本武道と東洋思想』大陸を源にする混交文化」『山梨日日新聞』二〇一四年一二月一四日ほか一紙（共同通信社配信）
「マンガ・アニメで日本を研究する」劉建輝編『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題「ベトナムシンポジウム 二〇一三」』国際日本文化研究センター 二〇一五年三月 一三三〜一三九頁

「書評 途方もなく重い論点 四方田大彦著『怪奇映画天国アジア』』共同通信文化部編『書評大全』三省堂 二〇一五年三月

マルクス・リュッターマン

● 著書

共編 *En Nexus: japanische Episoden übersetzt für die Ökumene* : Klaus Kracht zu Ehren aus Anlaß seiner Emeritierung, edited with Michael Kinski, Matthew Koenigsberg, Gerhard Leinss und Harald Salomon, Wiesbaden: Harrassowitz, 2013.

共編 *Japonica Humboldtiana. Jahrbuch der Mori-Oguri-Gedenkstätte Humboldt-Universität zu Berlin* vol. 16 (Jg. 2013), Wiesbaden: Harrassowitz, October 2014.

『近代日本の公と私「官と民」』(猪木武徳と共編) NTT出版 二〇一四年一〇月 四一二頁

● 論文

● 論文

“Der ‚Brief im Munde‘ (Fukunijoo) und der ‚Brief vom Huetpass (Koshigoecioo).“ *En Nexus: japanische Episoden übersetzt für die Ökumene* : Klaus Kracht zu Ehren aus Anlaß seiner Emeritierung, ed. with Michael Kinski, Matthew Koenigsberg, Gerhard Leinss und Harald Salomon, Wiesbaden: Harrassowitz, 2013, pp. 19–44.

『往来物』とは何か——その概念形成についての「考察」鈴木貞美・劉建輝編『東アジアにおける知的交流——キイ・コンセプトの再検討——』

国際日本文化研究センター 二〇一三年十一月 三〇三〜三二三頁

“Chapter 5: What does ‚Literature of Correspondence‘ Mean? An Examination of the Japanese Genre ‚Term örainono and its History.‛” edited by Matthias Hayek and Annick Horichi, *Listen, Copy, Read: Popular Learning in Early Modern Japan*, Leiden / Boston: Brill, September 2014, pp. 139–160.

『書簡の私的記号について』「問題と展望——公と私」の概念をよせて」猪木武徳・マルクス・リュッターマン編書『近代日本の公と私』「官と民」

NTT出版 二〇一四年一〇月 一九〜四四頁、四〇一〜四一〇頁

● その他の執筆活動

『過程』を視ること——火星と御月様の舞いの春にちなんで——『日文研』53号 国際日本文化研究センター 二〇一四年九月 二八〜三五頁

『まよがき』猪木武徳・マルクス・リュッターマン編書『近代日本の公と私』「官と民」NTT出版 二〇一四年一〇月 i〜iii頁

書評 “Audienzen und Texte. Rezension zu Tomita Masahiro, Chūsei kuge seiji monjoron (Untersuchungen zum administrativen Korrespondenzschriftum des mittelalterlichen Hofadels).“ *Japonica Humboldtiana* 16 (Jg. 2013), October 2014, pp. 235–255.

des mittelalterlichen Hofadels).“ *Japonica Humboldtiana* 16 (Jg. 2013), October 2014, pp. 235–255.

劉建輝

●著書

『日華学会関連高橋君平文書資料Ⅲ』（編著）国際日本文化研究センター 二〇一五年三月

『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題「ベトナムシンポジウム 二〇一三」』（編著）国際日本文化研究センター 二〇一五年三月

●論文

「地図と写真から見る満洲移民と現地社会」『人間文化——人間文化研究機構第二二回公開講演会「画像資料による日本人移民への新視点——満洲・ブラジル・南洋』Vol.21 人間文化研究機構 二〇一五年三月

●その他の執筆活動

「広辞苑編者の絵はがき——明治末期、欧州留学中の二五〇〇枚 人脈、世相映す」（インタビュー）『読売新聞』（大阪版・夕刊）二〇一四年二月四日

「岡部牧夫文庫目録——地域研究関係図書・資料——序文」井村哲郎編『岡部牧夫文庫目録——地域研究関係図書・資料——』国際日本文化研究センター 二〇一五年三月

日文研 五十五号

二〇一五（平成二七）年九月三〇日発行

編集 倉本一宏、佐野真由子、竹谷直子

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN

日本文学研究五十五年

一九五五年九月

二〇五五

国文学研究

会

刊

一